

II. 研究員座談会の記録

シリーズ「テストと入試をめぐる座談・快談」第2回開催報告

シリーズ企画趣旨

1979年からの共通1次試験とそれに続く1990年からのセンター試験は、42年をかけて日本固有の大学入試のスタイルを確立してきました。高大接続改革は、2021年からの共通テストでそれを変革しようとしたのですが、路線の大きな変更には成功していません。

この座談会シリーズでは、教育測定、テスト理論、大学入試、高大接続などの専門家が、入試とテストをめぐる、その社会・文化的側面にも触れながら、自由に創造的な議論を行います。それを通して、入試やテストに新たな観点から光を当てることを展望しています。

シリーズ第2回 「探究的な学び」と高大接続

—探究的な学習の成果は大学入学者選抜・大学教育にどう生かされるか—

司 会：柴田 好章（教育発達科学研究科教授，教育学部附属中・高等学校長）

話 題 提 供：今村 敦司（教育学部附属中学校副校長）

西浦 明倫（立命館大学教育学部教学推進課）

高橋まりな（当センター専任教員・専門学校非常勤講師）

コメンテータ：大 谷 尚（名古屋経済大学特任教授，名古屋大学名誉教授）

大塚 雄作（国際医療福祉大学教授，大学入試センター名誉教授，
京都大学名誉教授）

松下 晴彦（花園大学特任教授，名古屋大学名誉教授）

村 上 隆（中京大学文化科学研究科特任研究員，中京大学名誉教授，
名古屋大学名誉教授）

開 催 日 時：2024年2月2日（金）13:30-15:30

センター長挨拶（中谷素之）

本日は令和5年度、高大接続研究センター公開座談会にご参加いただき誠にありがとうございます。本日の座談会は『『探究的な学び』と高大接続—探究的な学習の成果は大学入学者選抜・大学教育にどう生かされるか』と題されておりまして、今日の高等教育において注目されるトピックのひとつである探究的な学びが、大学入学者選抜や大学教育とどう結びつき、生かされる可能性があるかについて、先端的なご議論をいただけるものと思います。コメンテータの大塚先生、大谷先生、松下先生、村上先生はまさに本テーマに関わってご活躍の先生方であり、お忙しいなかのご登壇を賜り誠にありがとうございます。また話題提供の今村先生、西浦さん、高橋さんからは、中高一貫校教諭、大学教育学部職員、そして大学教員というそれぞれの立場で高大接続についてご議論いただけるものと存じます。本企画が高大接続への皆様のご関心ご理解を深める機会となりますことを祈念しております。本日はどうぞよろしく願いいたします。

登壇者紹介

- 話題提供：
 - 今村 敦司 氏 (教育学部附属中学校副校長)
 - 西浦 明倫 氏 (立命館大学教育学部教学推進課)
 - 高橋 まりな 氏 (当センター専任教員・専門学校非常勤講師)
- コメンテータ：
 - 大谷 尚 先生 (名古屋経済大学特任教授)
 - 大塚 雄作 先生 (国際医療福祉大学教授)
 - 松下 晴彦 先生 (花園大学特任教授)
 - 村上 隆 先生 (中京大学文化科学研究所特任研究員)

2024.02.02
 名古屋大学大学院教育発達科学研究科高大接続研究センター 座談会 柴田 好章

初めに簡単に趣旨説明と、本日の流れについてお話をさせていただきたいと思います。

先ほどご紹介ありました通り、本日は3人の話題提供と、4名の豪華な先生方のコメントをいただけるという機会です。私も大変ワクワクしております。

話題提供は教育学部附属中学校副校長の今村敦司先生と、立命館大学教育学部の西浦明倫さん、西浦さんは社会人院生で本研究科の博士課程で研究もされています。高橋まりなさんは当センターの専任教員です。コメンテータは、当センターの元センター長である大谷尚先生、京都大学および大学入試センター名誉教授の大塚雄作先生、昨年度まで本研究科の研究科長であり現在花園大学の松下晴彦先生、本研究科の元研究科長であり現在中京大学の村上隆先生です。

近年の高校教育改革においては、「主体的対話的で深い学び」や総合的な探究の時間、或いは探究科目といったものが登場し、主体性或いは探究をキーワードに高校教育改革が進んでおります。また大学での学びにおいても自ら問う・自ら考えることの重要性に注目が集まり、高大間をつなぐ大学入学者選抜においても、アドミッションポリシーとして、主体性や探究が重視されてきています。入試が多様化する中、特に総合型選抜や学校推薦型選抜においては、高校までで行ってきた探究的な学びの成

問題意識

↑
探究的な学び
↓

● **高校教育改革**
 新学習指導要領(R4より順次実施)
 主体的・対話的で深い学び
 総合的な探究の時間、探究科目

● **大学入試改革**
 アドミッション・ポリシー
 多様化(総合型選抜、学校推薦型選抜)

● **大学での学び**
 自ら問う、自ら考える

探究における生徒の学びの姿

高等学校卒業修業標準(単位取得)後進修の課程
 探究的な探究の時間より

3
 2024.02.02
 名古屋大学大学院教育発達科学研究科高大接続研究センター 座談会 柴田 好章

アドミッション・ポリシーにおける「求める学生像」

表4 学力の3要素(4項目)ごとのキーワード

項目	キーワード
知識	知識、技能、基礎学力、基礎的な学力、基礎的な学力、基本学力、基本的な学力、基本的な学習、スキル、基礎知識、基本的知識、基本的な知識、基本知識、教科、知見、リテラシー
能力	思考、判断、表現、能力、プレゼンテーション、理解、読解、読み解、論理、発見、応用、活用、運用、分析、記述、発信、発表、明確な示
主体性	主体性、主体的、情熱、意欲、関心、目的、意識、積極、前向き、行動、チャレンジ、好奇心、探究、探求、興味、夢、熱意、意志、一貫、持続、続ける、おぼり強、視野、倫理、責任、貢献、向上
協働	コミュニケーション、共同、協同、協働、協調性、人間性、交流、共感、感受性、価値観

表5 学力の3要素(4項目)の記載率

全系統	主体性・有		主体性・無		合計
	協働・有	協働・無	協働・有	協働・無	
総数:847	0.30	0.23	0.00	0.01	0.54
知識・有	0.03	0.09	0.00	0.00	0.12
能力・有	0.02	0.08	0.00	0.01	0.11
知識・無	0.08	0.13	0.01	0.01	0.23
能力・無	0.08	0.13	0.01	0.01	0.23
合計	0.43	0.58	0.01	0.03	1.00

出典：藤松 理樹・天野 恒彦 (2021) アドミッション・ポリシーにおける「求める学生像」の分析、大学入試研究ジャーナル、第31号、1-6.

赤丸は、引用者

4
 2024.02.02
 名古屋大学大学院教育発達科学研究科高大接続研究センター 座談会 柴田 好章

果を生かして大学につなげていくという試みも増えてきております。以上をふまえ、本日は探究というキーワードでこの3つをつなげていきたいと思っております。

たとえば榎松さんらの研究によると、この探究を含む「主体性」というキーワードがアドミッションポリシーに含まれているかどうかを調べると、0.43、0.53とほぼすべての大学学部において求める学生像のキーワードの中に上がっています。そういったものをどのように具体的に、大学入学者選抜の中で評価していくのかということについて、本日考えられればと思っております。

今村 敦司 氏

高校教育、特に探究的な学びを重視している学校として、生徒を大学に送り出している側の立場から

探究的な学びの先進校としての名大附属学校

研究開発 総合人間科 - 総合的学習の時間の先駆け 1990年台
→ SSH、SGH、WWL などを通して、探究的な学びをリード

大学入学者選抜で、生徒の探究心や探究力、また高校での学びの過程や成果が、評価されているか？

また、大学および入学者選抜に対して望むことは？

5 2024.02.02 名古屋大学大学院教育発達科学研究科臨床大学院研究センター 座談会 奥田 好雄 名古屋大学

今村先生からは、総合的な探究・総合的な学習の時間の先駆けとなった附属学校の総合人間科、この取り組みを本校では1990年代から行っておりますので、これについてご紹介していただきつつ、高校までで学んだ学びの過程や成果、特に探究心や探究力、こういったものが大学入学者選抜で十分評価されているのか、或いは送り出し側の高校から大学入学者選抜に対して望むことがあるのかといったお話を聞かせていただければと思っております。

西浦 明倫 氏

大学教育、特にアドミッションの立場から

探究的な学び

高等学校までの学びの成果を、大学教育に接続する上での、入学者選抜のあり方は？

特に、探究心や探究力を、総合型選抜等で、どのように評価していくのか？

実践的な課題とともに、評価方法の研究開発の取組を紹介

6 2024.02.02 名古屋大学大学院教育発達科学研究科臨床大学院研究センター 座談会 奥田 好雄 名古屋大学

西浦さんには、特にアドミッションという立場から、探究的な学びを含む高校までの学びの成果を、特に総合型選抜等でどのように評価していくのかという辺りの課題や、そういった実践的な課題に応える学術的な研究として、評価方法の研究開発の取組みについてお話をいただきたいと思っております。

高橋 まりな 氏

生徒・学生の学びの観点から高大接続を充実させる立場から

大学での学びを見通した学習の機会を、高校段階でどう保障するか？

- ・学ぶ力の基礎を身につける（アカデミックライティング）
- ・大学の学問に触れる機会の提供（学びの杜、一日総合大学）

大学での学びを円滑にする学習の機会を、大学入学後にどう保障するか？

- ・大学初年時入学生対象の講座（アカデミックライティング、情報探索）
- ・専門学校初年次の国語教育（日本語、文章表現論）

7 2024.02.02 名古屋大学大学院教育発達科学研究科臨床大学院研究センター 座談会 奥田 好雄 名古屋大学

当センターの高橋まりなさんには、生徒学生の学びの連続性という観点から高大接続を充実させるという立場で、大学での学びを見通した学習の機会を高校段階でどう保障していくのか話していただきたいと思っております。名古屋大学では大学の学問に触れる機会の提供として、村上先生が学部長のころから取り組んでいる「学びの杜」を今も当センター主催で続けております。また

附属学校では一日総合大学という行事も行っており、当センターはそれらに主催・共催で関わっております。一方で大学入学後に大学での学びを円滑にするための学習の機会として、初年次教育としてのアカデミックライティングや、専門学校での国語教育などの取り組みをされておりますので、幅広い立場から2つをつなぐお話をいただければと思っております。

附属中・高等学校における探究的な学びの実践（今村敦司）

名古屋大学教育学部附属中学校の副校長をしております今村と申します。よろしくお願いたします。私は本校に赴任してからもう 26 年になりますが、先の柴田先生の紹介にあった「総合人間科」という授業は赴任当時既に存在していました。まだ世の中では「探究的な学び」はもちろん「総合的な学習の時間」や「総合学習」が始まる前の話です。当時は本当に毎日のようにいろんな学校から、どのような形で総合的な学習・探究学習しているのかという相談を受けたり、本校の視察を受け入れたりという状況だったのを覚えています。

私は名古屋市立の中学校からこちらに変わって参りましたので、総合的な学習の時間とか総合人間科については、それが何かというのもよくわからないまま勉強を始めました。総合人間科では学年ごとに大テーマが決まっており、それに従って各事業を進めるというのが大枠でした。具体的には中 1 と高 3 のテーマが「生き方を学ぶ」、中 2 と高 1 が「生命と環境」、中 3 と高 2 が「平和と国際理解」でした。

中高一貫校の入口と出口で「生き方を学ぶ」

本校中 1 の生徒たちは、いろんな小学校から選抜を経て集まってきます。小学校の 6 年間はずっと同じ学校・同じ価値観で過ごしてきているわけですが、そこから、同じ小学校から入ってくるのが多くて 1 人いるかどうかの別の集団を作ることになり、今まで当たり前だったことが全然当たり前でなくなるという体験をします。そういう中で様々な価値観に触れて、自分の当たり前は当たり前じゃないのだということを知ろうというのが第一のプロジェクトでした。また、入学後 6 年間総合的な学習の時間を学んでいくにあたって基本的な手法を知る必要があります、これら 2 つが中 1 でやるべき大きなことであつたのを覚えております。

具体的な進め方としては、多様な価値観を知ることということでいうと、私も担当したところでは、友達同士のインタビューがありました。どんなことを大事に思っているかとか、どうしてうちの学校に進学したのかとか、将来の夢は何かというようなことをインタビューし合う。その次に、友達の保護者にインタビューをします。親御さんは子どもに何を期待してうちの学校に入れたのかとか、親御さんが大事にしていることは何かといったことを聞きます。その次に、同じ附属学校の高校生の先輩たちにインタビューをします。

本校は併設型中高一貫校ですので中学からそのまま高校に上がれるのですが、高校からも 1 クラス選抜で取って、高校 1 年生から完全にミックスして 3 年間過ごします。普通に公立中学を経験し入試を経て本校に入ってきた高 1 の先輩たちが、どんなことを考えているか、どんな経験をしているか、またどんなことを考えてうちの学校に入ったかというような話を聞いていました。それから、もう進路が決まっている高 3 の先輩たちには、どうやってこの学校の中で進路を選んできたかとか、うちの学校でよかったことはどんなことなのかといったことを聞きます。その他にも教育実習生にインタビューをするなど、実に多様な人たちの話を聞く中で、自分にとって今まで当たり前だったことは当たり前でない、もしくは、これから先こんな見通しを持って本校で過ごせるんだというようなことを知ってゆきます。

各自が興味関心を持つ職業の人にインタビューするという活動も行いました。まず、興味のある

る職業を絞り込んで、その人たちの仕事がどんなものかを調べます。インタビューしたい人を決めたら、当時は賭けだなと思っていたのですが、練習をした後に各自電話でアポイントメントを取らせました。大概の興味関心には名古屋大学内に専門家がいますので、研究室に内線電話をかけて、こういう趣旨でこんな話を聞きたいと本人に説明させました。学校外の人たちにも、失礼のないように準備をしながら、アポイントメントを取らせませす。実際に OK が取れたら、自分で手書きで依頼状を書き、どんな質問を考えているか手紙の形で相手に渡します。インタビュー当日は、教員の引率が必要と言われることは少なかったので、基本的に生徒だけで話を聞きに行かせました。話を聞いたら、すかさずお礼状を書きます。聞いた内容はまとめて発表し、研究収録という形で、A4 の冊子に 1 人 2 ページぐらいでまとめさせました。

たまにすごい大物が捕まることもありまして、名古屋市長に偶然アポが取れたりとか、それからニュースキャスターに偶然アポが取れたりとかいうようなことがあったりもしました。大人はこんなふうには仕事に就いている、そのときに大事なことはこんなことなんだといったことも、中学 1 年生の総合的な学習の時間に学びます。この活動は基本的に今も続いています。

高 3 の大テーマにも再度「生き方を探る」を設定しています。自分の生き方をどうするのか、高校を卒業したらどんな生き方をしたいのかということで、基本的には自分の進路先に関する研究ということになります。具体的に言うと、自分の学びたいことがそこで学べるかを希望する学部の教員にインタビューに行く、もしくは直近の進路である大学ではなく、その先に自分が目指す職業の人にインタビューに行くということで、高校 3 年生の大体 6～7 月までにインタビューを済ませて、こんなことを考えて仕事をしているんだとか、こんな学びがあるんだというようなことを考えます。

中 1 は多様な価値観を知る、高 3 は自分の生き方を探るということで、入口と出口の総合学習の取り組みはこのような形で進めていました。

自身の興味関心を「生命と環境」で探究する

中 2 と高 1 は「生命と環境」を大きなテーマとしました。我々の考えでは、「生命と環境」というテーマには無理をすれば何でも位置付けることができます。生徒自身に研究したいテーマがあれば、それを生命と環境という大きなテーマのもと、継続して探究できるようにしました。もちろん、自分でテーマを思いつかない場合は、生命・環境を手がかりにしながら、総合的な学習の時間に自分で学習しテーマを決めます。その上で、個々人のテーマに関して教えてもらえるような研究者や企業にインタビューを行い、その成果を発表し研究収録にまとめるという取り組みをしました。

中 2 にとっては進路選択はまだ遠い将来ですので、気になっている時事的な話題について考えることもありますし、高 1 になるともう少し専門的に、自分が学びたいテーマを生命や環境とどう結びつけていけるかということを考えながら、個人研究を進めていきました。

研究旅行で「平和と国際理解」を探究する

中 3 と高 2 は少し毛色が違いますが、平和と国際理解をテーマに設定しています。社会に出て大人になる上で、平和や国際理解については、一度真剣に向き合って自分自身の考えを形成し

てほしいという思いがあります。修学旅行を本校は研究旅行と呼んでいますが、その行き先である広島・沖縄でフィールドワークを行います。

中3の旅行先は広島で、平和記念資料館訪問と、被爆者の証言者の方々のお話を実際に聞く活動が中心になります。中3の研究旅行で私が重視しているのは、大久野島での宿泊です。ご存知の通り毒ガス資料館のある島、日本が国民に内緒で毒ガスを作っていた施設のあった土地です。日本は広島長崎で大きな被害を受けましたが同時に加害者にもなり得た、戦争というのはそういうものです。ただただ一方的に被害を受けることは戦争ではありえないのだ、という構図をしっかりと勉強してほしいという思いがあって、生徒たちには大久野島訪問を、個々人が戦争についてどう思うのか考えてもらう機会にしています。探究活動としては、グループで平和と国際理解に関するテーマを決めて、現地でフィールドワークをして、最終的には口頭発表をして研究収録にまとめます。

高校2年生は行き先が沖縄ということで、過去のことよりも現代的な課題として平和と国際理解を扱います。従って、沖縄の現在がどうなっているか、米軍基地の問題と復興への影響など、複雑な関係をどう考えるかということについて学んでほしいという思いで進めていました。

研究としての質を上げる試み

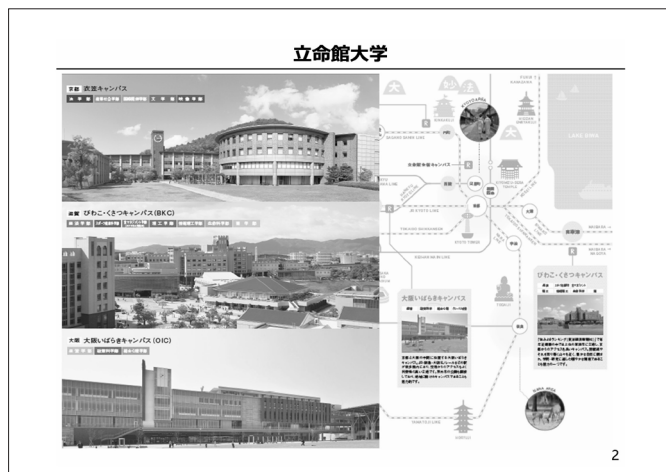
SSH（スーパーサイエンスハイスクール）とSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定を受けてからは、高校生の研究の精度を更に上げなければならないということで、自分で決めた研究テーマについて論文を書けるようになるようなカリキュラムを目指しています。高校1年生では基本的な論文の書き方を学び、2年生で各自テーマを決めて、その研究をどうやって実施するか自分で考えます。フィールドワークを行ったりもしくは必要に応じて実験を行ったりと、それぞれの方法で論文のデータをとります。この研究は最終的に高校3年生の前期までに発表します。

探究的な学びに取り組んで本当によかったと思うのは、必ずしも全員とは言えないにせよほとんどの生徒が高校卒業時に、自分は何のために大学に行き何を学ぶのか、そしてその先どうしたいのかということを説明できる状態になっていることです。受験勉強から解放されて遊べるというようなことではなく、自分の好きなことを思いきり学べるという感覚で大学に入っていく生徒が結構います。そして入学後には本当にのびのびと自分の好きなことを深く学んでいくという、探究心がきちっと育てられているんじゃないかなと思っています。

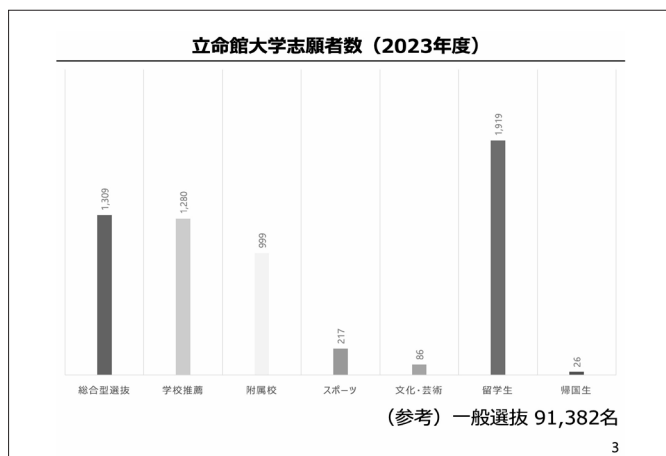
大学入試でも、総合型選抜とか学校推薦型選抜では、何を学びたいのかが明確な志願理由書を書けます。そして、総合的な探究の時間の学びによって、そのことを実証できるだけの中身を持っていますので、面接で質問を受けても、自分が実際に取り組んだことを答えれば良いというところまで準備ができています。もう少し踏み込んでやれる子もいまして、本校の卒業論文を持って大学入試に行くというようなこともありますし、わざわざ自分で他の土地まで乗り込んで、あちこち体験をして調べてその結果をまとめる生徒もいます。逆にそういうことには乗ってこない生徒もいますが、探究心を育てていくことで、大学での学びに対して「専門的な学びがやっどできる」という感覚を持った生徒を育てることは、ある程度うまくいってるんじゃないかと思っています。

「探究的な学び」と高大接続—大学からの視点—（西浦明倫）

探究的な学びと高大接続について、大学からの視点とタイトルには書いておりますが、立命館大学の一事例としてお聞きいただければ幸いです。本日は、私のアドミッションオフィサーとしての経験と、現在取り組んでいる研究という2つの観点からお話させていただこうと思っております。



写真は用意しました。現在立命館大学は、京都だけではなく滋賀、そして大阪にあわせて3つのキャンパスがあります。本日は、一番上の、金閣寺からすぐ近くの衣笠キャンパスよりオンラインで参加しております。



や附属校にも広げていきたいと考えております。立命館大学の16の学部のうち、法学部では実施しておりません。それ以外の15の学部が、総合型選抜入試を実施しています。1次選考・2次選考という形で2段階の選抜入試をとっておりまして、1次選考は大体が書類選考です。どんな書類選考かというと、例えばエントリーシートや課題文書を選考し、2次で個人面接を中心に見る学部が多くなっています。

ではここから具体的に総合選抜入試におけるアドミッションポリシーと選抜内容に関して、3つの学部の事例を使ってご説明いたします。

私は約7年半の入試広報の仕事を通して、1年間あたり約150校の高校・予備校の進路担当者とお話をさせていただきました。そして現在はその経験をもとに、高大接続の探究型教育改革に携わっております。

本日は名古屋大学の関係者の方々から構成されておりますので少しだけ立命館の雰囲気を知っていただけたらと思います、スライドに

参考として記している通り、一般入試では併願を含めて約9万人が立命館大学を受験しています。今日特に焦点を当てたいのは、スライドの一番左、総合型選抜の入試です。こちらの志願者に関してはこの数字の通り約1300人で、そのうち合格者は約470人です。

「探究型の学び」に関わる入試として、今回は総合型選抜入試に焦点を当てますが、今後は学校推薦

立命館大学総合型選抜入試におけるAPと選抜内容（例）

学部	アドミッション・ポリシー	選考内容 (一部抜粋)
文学部	文学部では、以下のような学生を求めます。 (1)文学の分野・領域に対して高い関心と探究心を持つ者 (2)人文学を学ぶために必要な基礎学力を有する者 (3)学域・専攻での学びを通して幅広い知識と豊かな表現力を身につけて、人間と社会が抱える諸問題を主体的に思考・解決しようとする意欲を持つ者	入学後、探究したいテーマと学習・活動計画
スポーツ健康科学部	スポーツ健康科学部は、スポーツ健康科学の教育・研究における際の融合を通して、人々の健康、幸福な社会、ならびに平和な世界を創造するとともに、志高く未来を拓く人材を育成することを目的としています。 (1)論理的に考える基礎的素養を身につけ、スポーツ健康科学分野を学ぶために必要と学力を有する学生 (2)多様な価値観を持った人々と及び異分野の人々と融合した学びに、意欲的に取り組むことができる学生 (3)社会課題の解決及び社会貢献のために、スポーツ健康科学分野の学びに主体的に取り組める意欲を持つ学生 (4)自身の持長を理解し、自身の持っている人間の魅力を発揮する意欲を持つ学生 生命科学部は、「基礎学力に加え、論理的思考能力、問題発見・解決能力およびコミュニケーション能力を備え、生命科学部で学ぶことに対し、積極的な姿勢を持つ学生を求めます。具体的には、「生命科学の世紀」といわれる21世紀において、生命科学の学術としての発展に寄与し、人類の幸福に、自然と調和した持続可能な豊かな社会の実現に貢献しようという強い意志を持ってこれらに、下記3点の能力を持つ者を求めます (1)生物学の学術の前提となる確かな基礎学力を有する者 (2)真理を探究するために必要な論理的思考能力を有する者 (3)課題を推進していくために必要な問題発見・解決能力やコミュニケーション能力を有する者	あなたがこれまでに取り組んできた課題発見・解決の取り組みを1つ紹介し、(略) 2,000字以内で具体的に記入してください。
生命科学部		高等学校等で取り組んだ探究的な学習、課題研究、自主研究等について分かりやすく【プレゼンテーション】(略)

5

基づいてどんな選抜をしているかを一部抜粋してご紹介しますと、例えば「入学後に探究したいテーマと学習・活動計画」を記載するという形の入試となっています。

次に、スポーツ健康科学部です。こちらのアドミッションポリシーは4つで構成されています。そのうちの3つ目で「学びに主体的に挑戦する意思」を持つ学生という表現をしています。4つのアドミッションポリシーに基づいてどんな選抜をしているかということ、「これまでに取り組んできた課題発見・解決の取り組み」を、「2千字以内で具体的に記入」してくださいと、書かせる入試をしています。

最後に生命科学部です。こちらのアドミッションポリシーに関しては3つのうち、3つ目の「課題を推進していくために必要な問題発見・解決能力」に注目していただきたいと思います。選考では、「高等学校等で取り組んだ探究的な学習」を「プレゼンテーション」してくださいといった内容になっています。

以上を踏まえ、私自身の問題意識としては第一に、高校からの学びの成果を選抜に活かしたいということがあります。例えば文学部でしたら、高校までの学びではなく、入学後を問うています。2つ目が、主観的な評価でいいのかということです。文字で書かせたりプレゼンテーションをさせたりして、それに対してはもちろん主観的な評価にならざるをえない側面もございますが、選抜の質をいかに高めていけるか。以上のような問題意識を持っております。

始めに文学部です。文学部のアドミッションポリシーには、見ていただきたい点が2つあります。まず1つ目に、「探究心を持つ者」という言葉を使っています。先ほど柴田先生の冒頭の説明にもあった通り、本学文学部においても使われております。3つ目の項目の中には、「主体的に追求・解決しようとする意欲」とあります。こういったアドミッションポリシーに

研究の背景 「実践的な問い」

1. 高等学校の教員からの声

- 大学が探究学習を評価する際は、成果だけでなく学習の過程も評価して欲しい。
- 社会や他者への貢献を学びの動機としながら、主体的に学ぶ力を大学進学後もさらに発展させて欲しい。

出典：筆者が入試広報時代（2011～2018）に実施したアンケート

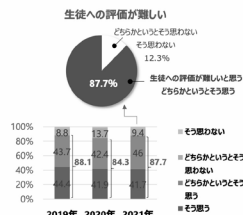
2. 大学の教員からの声

- 高等学校段階における探究学習の到達点を分析する必要がある。
- 高等学校では探究の姿勢よりも基礎知識を身に付けて欲しい。

出典：立命館大学教育開発推進機構TLニュース No.45

3. アンケート調査

- 高等学校教諭415名のアンケート調査より、87.7%の教諭が、「総合的な探究の時間」における生徒の評価に課題を抱えていることが明らかとなった。



出典：一般社団法人入試4技能・探究学習推進協会のアンケート調査（2021年9月実施）

6

それらを「実践的な問い」という形でまとめたのがこちらのスライドです。3つご紹介しようと思います。

1つ目が、アドミッションオフィサーとしての経験、先生方から聞いてきた声によるものです。例えば大学が探究学習を評価する際は、コンクールで1位になったというような成果だけでなく、学習の過程も評価して欲しいという声があ

りました。あるいは大学の教員からの声では、高等学校段階における探究学習の到達点を分析する必要があるのではないかという意見があります。アンケート調査ではどういことが言われていたかという、総合的な探究の時間における生徒の評価に課題を抱えているという高校の先生方が87%ってというような結果も出ていたりします。

探究的な学びの評価に関するこれまでの取り組み

- 1999年度の高等学校学習指導要領改訂において、「総合的な学習の時間」が創設されたことを契機に、日本における教育評価は新たな局面を迎えた。
- テストでは測定できない、生徒の自由な表現を引き出す評価課題に対して、質的な評価が求められるようになったことで、ポートフォリオ評価や、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価等が開発されてきた。

1 パフォーマンス評価は、評価者の主観が入るので、評価者はパフォーマンスの質を適切に価値判断するための鑑識眼を求められ、また、通常は複数の評価者がモデレーションによって「関連性」を担保することが必要になる。

出典：松下佳代（2012）

2 S S H 8 校との連携による「標準ルーブリック」が開発されたが、この標準ルーブリックは、S S H 8 校の課題研究の目標やカリキュラムの類似性に基づき作成されたものであり、全ての高等学校に適用できるとは限らない。

出典：西岡加名恵ほか（2020）

総合的な学習の時間が創設されたことを契機として、ご存知の通りポートフォリオ評価やルーブリックを用いたパフォーマンス評価が開発されてきました。スライドではこれに関する先行研究を8つご紹介しています。

これらの研究を踏まえた上で私が思うのは、総合的な探究の時間における主体的対話的で深い学びを評価するには、教師があらかじめ設定した評価基準で評価するのは難しいのではないかと思います。そしてもう1つ、探究的な学びの深まりを捉えるには、学習の過程に着目する必要があるということです。

探究的な学びの評価に関するこれまでの取り組み

3 ルーブリックによる評価基準の明確化は、学習と評価の関係を逆転させ、学習を重めたり形骸化させたりする可能性がある。

出典：森敏昭（2015）

4 評価基準が予め明確に設定されている状況下では、「教師は「テストのための教育」を強いられることになり、生徒は学習ではなく、パフォーマンスとして定められているゴールの達成を求められるようになる」と警鐘を鳴らしている。

出典：OECD（2005）

5 「一人ひとりの子どもの「問題解決のプロセス」すなわち、課題を見つけ、自ら学び、主体的に追求するプロセスこそ総合学習の評価対象」だと述べている。

出典：加藤幸次・安藤輝次（1999）

6 従来、ルーブリックは、最終成果を評価の対象とすることが多かったが、生徒が探究学習を通して身に付けた能力は、必ずしも最終成果に反映されない場合があるため、「最終成果」から「プロセス」へ評価の対象は拡張すべき。

出典：二宮衆一（2019）

7 「課題解決のプロセスを評価するために、このようなポートフォリオを残すべきか、難しい問題である」と述べている。

出典：加藤幸次・安藤輝次（1999）

8 ポートフォリオ評価は、信頼性などや実施する労力や時間と効果との関係など大きな困難性も指摘されている。

出典：大泉早智子（2022）

そのためには子どもの学びにおける問題解決過程を可視化し、学習過程を評価していく必要があります。私は名古屋大学の教育方法学の研究室で、柴田先生のご指導を仰いで2年が経とうとしております。学んでいく中で開発したのが、生徒の学習過程を可視化するためのPS（Problem Solving）分析という手法です。

PS分析とは、授業分析の枠組みの中で、生徒の問題意識と解決の手立ての連鎖的關係を図式化する手法です。具体的に説明します。

新たな評価方法に向けた取り組み

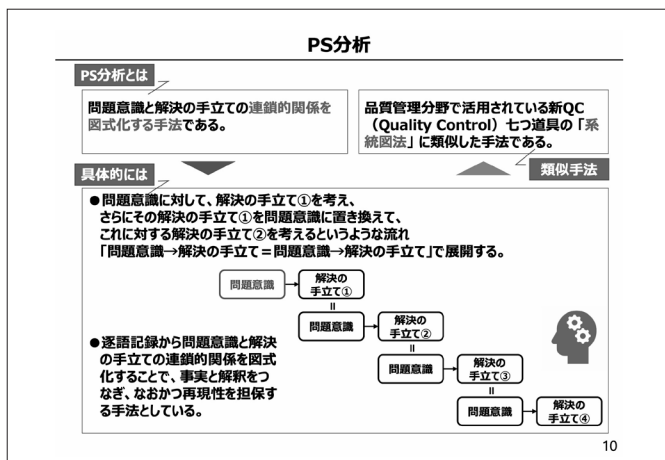
- 「総合的な探究の時間」における主体的・対話的で深い学びを評価するには、教師が予め設定した評価基準で評価することが難しい。
- 探究的な学びの深まりを捉えるには、学習の過程に着目する必要がある。

学習の過程の可視化の試み

子どもの学びにおける問題解決過程を可視化し、学習過程を評価する。

学習の過程
➡➡➡
評価

名古屋大学大学院での研究



図のように、まずは生徒の問題意識があり、生徒はこの問題を解決するために手立てを考えます。その解決の手立てを実行するにあたっては、手立てを実行するための新たな問題意識が出てきます。こういった連鎖関係を見ていくのがPS分析です。類似する手法としては、品質管理の分野ですが、新QC (Quality Control) の系統図法があります。

分析対象

分析対象	立命館守山高等学校のグローバルコースに在籍する3年生43名を対象に開講されている「グローバルAP」とする。同科目は、学校設定科目で週1時間2単位の通年科目である。
選定理由	<ul style="list-style-type: none"> ●同校は「リツモリは超・探究」を標榜し、生徒が問題意識をもってよりよく学んでいる点に特色があり、学習者自身による探究学習の充実が全国的にも注目されている。 ●同校のグローバルコースを選定したのは、生徒の興味・関心を世界へと広げ、独自の「ホモン」の体験を重視し、探究学習を先駆的に実施されているからである。 ●グローバルコースでは、2018年よりカリキュラム改革を行い、調べ学習が中心になっていたことが課題の「卒業論文」を廃止し、「グローバルAP」を新設した。 ●「グローバルAP」は、以下の目標を掲げ大学教育との接続を円滑に行い、大学入試への展開も視野に入れられている。一方で、「評価」に多くの時間が掛かることが課題として考えられている。これらより、本研究の対象に最適と考え研究対象として選定した。 <p>生徒向けのシラバスに記載されている当該科目の目標</p> <p>①大学進学後も自分の研究テーマを継続したり、ソーシャルビジネスを立ち上げたりするようなスキルを養成し、持続可能な社会の構築に貢献する「地球市民」となる。</p> <p>②社会課題解決のためのプロジェクト（マイプロジェクト）を探究論文（約10,000～12,000字）としてまとめる。</p> <p>③それぞれのプロジェクトをビジネスコンテスト、ボランティア活動表彰、論文コンクール等の外部コンテスト・アワードを各自であつて全員が応募し、成果を学外に広く発信する。</p>

11

この手法開発に至った研究の、分析対象をご紹介します。立命館大学に4つある附属校のうちの1つである立命館守山高校で授業分析を行いました。

分析対象

本研究では、第15回「進捗報告2」の生徒Uの発表を取り上げる。

グローバルAP単元概要

グローバルAP2022年度スケジュール

[1 学期 (前期)]

回	月日	概要
第1回	4月14日	ガイダンス、発表開始
第2回	4月21日	特別講義 1
第3回	5月12日	進捗報告 1 第6章 環境問題とESD
第4回	5月19日	進捗報告 2 第7章 国際協力
第5回	5月26日	進捗報告 3 第8章 貧困と格差
第6回	6月9日	進捗報告 4 第9章 持続可能な生産と消費
第7回	6月16日	進捗報告 5 第10章 紛争と平和
第8回	6月23日	進捗報告 6 第11章 災害と防災
第9回	6月30日	進捗報告 7 第12章 子どもと若者
第10回	7月7日	特別講義 2
第11回	7月15日	個別プロジェクト10

[2-3 学期 (後期)]

回	月日	概要
第12回	9月1日	ガイダンス、発表開始、特別講義
第13回	9月15日	個別プロジェクト2
第14回	9月22日	進捗報告 1
第15回	9月29日	進捗報告 2
第16回	10月6日	進捗報告 3
第17回	10月13日	進捗報告 4
第18回	10月20日	進捗報告 5
第19回	11月10日	進捗報告 6
第20回	11月17日	進捗報告 7
第21回	11月24日	特別講義 1
第22回	12月8日	特別講義 2
第23回	12月15日	特別講義 3
第24回	12月22日	特別講義 4
第25回	1月19日	最終成果報告会

12

対象としたのは高校3年生の生徒Uの発言です。この高校では、1クラス40名の生徒が各自の探究テーマを掲げ、それを1年間かけてまとめていくという授業を行っております。実際にどんな発言があったのかは次ページのスライドでご紹介しています。特にご紹介したい要点の部分を網掛けにしました。

発言全文

1. まず初めに、1学期の振り返りから、1学期は子供が子供らしく生きていくためには、実体験を通してヤングケアラーの存在を広めるというテーマのもと、学校の先生達にヤングケアラーの存在を知ってもらえるようなプロジェクトを考えてました。
2. でも夏休みに、いつものソーシャルワーカーである幸重さんがやっておられる、子供ソーシャルワークセンターっていうところに行って、ボランティアをしに行っただんですけど、やっぱり家で子供たちはケアに追われているからこそ、ケアから離れる時間を確保することが一番大事だなって思ったのと、子供たちにとって大人がやるようなケアを子供たちはしているの、やっぱり勉強だったり、友人関係だったり、健康面だったり、いろんなところで支障が出てきて、日常生活に悪影響を及ぼしていることを強く感じました。
3. そこで本報告では、今後行う2個のアクションについて述べることにします。
4. 社会課題としては、これは2021年に行われた全国の教育現場に対する初のヤングケアラーの実態調査です。
5. これまで県単位でいろんな調査がされてきたんですけど、全国でその大規模で調査をされたのは2021年が初めてです。
6. あと、現在でもヤングケアラーに特化した法律は特はないので、このことからもヤングケアラーの認知度と問題意識の低さがわかると思います。
7. あと、Googleでヤングケアラーって調べたら、厚生労働省のホームページがあって、一番下にスクロールしたら、いろんな相談窓口とか団体とかがあるんですけど、ここにもある通り実際に7割の人が相談したことはないというふうに答えています。
8. あと実際に、ボランティアでセンターに行って「相談したことある？」と聞いても、「ない」と答える子がほとんどというか、全員でした。

13

発言全文

9. では何で私がこの社会課題に挑むのかとところで、高校1年の頃、母が病気になるって、私はヤングケアラーになりました。
10. 高校1年から高校3年の2年間のケア経験を通じて、やっぱりしんどいこととか、つらいこととかが分かるのは自分やし、その同じ思いをしている当事者のために自分ができることって何かって考えて、今のプロジェクトを考えました。
11. アクションは2個あって、一つ目が「ヤングケア森キャン」の開催です。
12. ヤングケアというのは、ヤングケアラーの略を勝手に自分で作りました。
13. それで、このヤングケア森キャンというのは、ほんまに楽しむことがメインで、どっちかっていうと何か、心、精神的なサポートになります。
14. この「ヤングケア森キャン」の目的は、子供たちがいつも頑張ってるケアから離れて、リフレッシュできる時間を楽しめる時間を作るためです。
15. もう1個がフードデリバリーサービスの提供で、先程のはどちらかという楽しむのがメインだったんですけど、今度は本当に実生活を助けるような支援になってます。
16. この目的は、ケアの一部、買い物とか料理における負担を減らすためです。
17. 夏休みに行ったボランティアで、子供たちにアンケートっていうか、口頭で聞いたんですけど、「夜ご飯、何食べた？」と。
18. 多分みんなが食べてるような朝ご飯のサンドイッチとかを4人で食べたり、コロッケ1個やったり、中には食べてない子もいたり、あと551の肉まん1個とかの子もいました。
19. あと買い物は、これぐらいの子（発表者の腰ぐらいの背の高さ）で「10キロのお米を抱えてお家まで帰ってる」って書いてはりました。
20. こういったように偏った食事や、不健康な食生活を改善するためでもあります。

14

発言全文

21. それを通じて、ケアに追われる子供たちが自分らしく過ごせる自由な時間を、確保したいと思っています。
22. 準備と調査はここに書いてある通りで、8月20日に小学生ボランティアに参加して書いてあると思うんですけど、そこでアンケートを実施したのは、さっきのサンドイッチとかコロッケの話です。
23. その様子が、こうやってみんなでご飯食べて、ご飯食べながら、楽に聞いてました。
24. どんな物を食べているの？って。
25. 実践のところで、「ヤングケア森キャン」の開催はこのチラシを作ったんですけど、日時は2022年の10月9日、日曜日です。
26. 場所は希望が丘文化公園で、対象はセンターに通うヤングケアラーの子らと一般で募集したヤングケアラーの子たちが参加してくれます。
27. 参加費は無料で、内容はアスレチック体験とか、みんなでカレーを作ったりします。
28. もう1個はフードデリバリーサービスで、これはセンターに通うヤングケアラーの家庭とその子がいる家庭です。
29. 内容は月1回から始めたいと思います。
30. 何を配るかというと、センターで作ったお弁当とか、センターがある日の夜はこうやってみんなで、琵琶湖の船のミシガンとか、近くに吉野屋があるんですけど、その余り物、余り物って言うのも衛生的には全然大丈夫なんですけど、その余り物をみんなで食べてます。
31. こういったようにいろんなところで協力機関が周りにはあるので、その方にお願いして協力してもらおうと思っています。
32. 方法は、センターに来ている子はみんなバラバラで、滋賀の北から南までいろんなところに住んでいるので、配布日を決めてボランティアさんと一緒に車で届けたいと思っています。

15

発言全文

33. 成果の検証としては、ちょっと検証方法はまだ予定なんですけど、ヤングケアの方は小学生とボランティアさん、フードデリバリーサービスの方は子供たちとその保護者の方に、アンケートをしたいと思っています。
34. プロジェクト側は行われていないので、成果は分からないんですけど、このプロジェクトで子供たちが一時的にでもケアから離れてリフレッシュできたり、自分らしくいれる時間があればいいなと思います。
35. フードデリバリーは、買い物とか料理の日の時間が、やっぱり子供たちにとっては一番の、一番というか人によると思うんですけど、大きい負担になっていると思うので、その時間を月1回でも少しでも短縮して、その間に今まで我慢してた自分がやりたいことに時間を使ってもらえればなと思います。
36. 課題はどっちのアクションにおいても、やっぱり継続的にやっていくことかなって思いました。
37. 協力機関は子供ソーシャルワークセンターの方々と、企画運営から資金援助まで全てにおいて協力してもらいました。
38. 今後の展望はイベントの規模拡大でことで、やっぱりここに通ってる子供たちは通ってる時点で支援が受けられているので、まだこの存在を知らないような1人でケアを抱えている子供たちに来てもらうことが、やっぱりこの存在を知って参加してもらうことが、一番大きい効果を発揮するんじゃないかなと思います。
39. なので今後は、以前、私の経験について取材してもらった、この記事を書いてくれた記者さんをお願いして、私のマイプロジェクトについて記事にしてみようと思います。
40. もう1個はさっき言った、頻度と継続的にやっていかなあかんかなというふうに思っています。

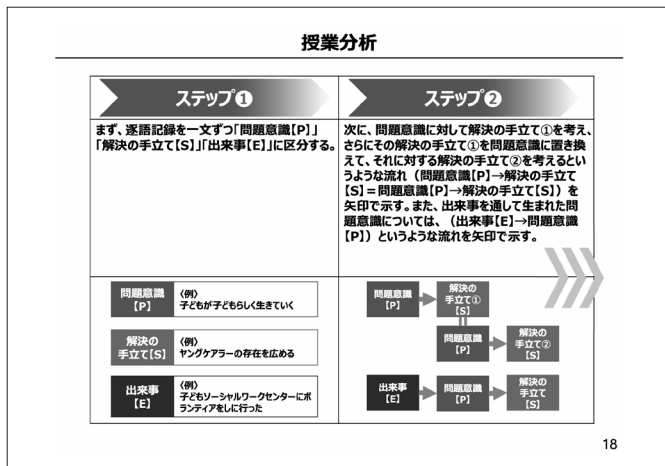
16

発言全文

41. 自身の姿容としては、1学期のときは周囲に知ってもらうことがヤングケアラーが生きやすい社会を作れると思うんですけど、もちろんそれもそうなんですけど、やっぱりヤングケアラーって、1人親であったり、貧困であったり、何かいろんな問題が絡み合ってる複雑な問題なんで、それを全部理解してもらってというのは難しいなっていうふうに思いました。
42. やっぱり今言ったようなプロジェクトをやったところで、効果はあると思うんですけど、家に帰ったら絶対にケアがあるので、こういった状況を変えていくためには、やっぱり社会全体でヤングケアラーに目を向けて、こういうのいろいろ知ってもらって、法律を変えることが最終的には重要だと思いました。

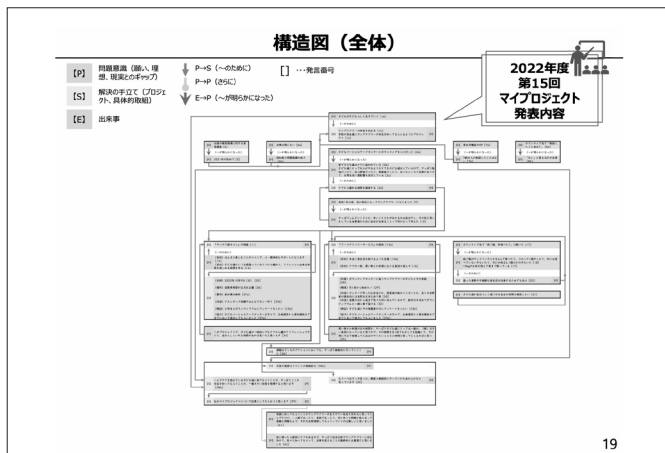
17

まず、この生徒Uは、「子供が子供らしく生きていくために、ヤングケアラーの存在を広める」というテーマを掲げました。そこで夏休みにボランティアをしに行きました。そこでケアから離れる時間を確保することが一番大事だと感じ、この報告では、今後行う2個のアクションについて述べています。

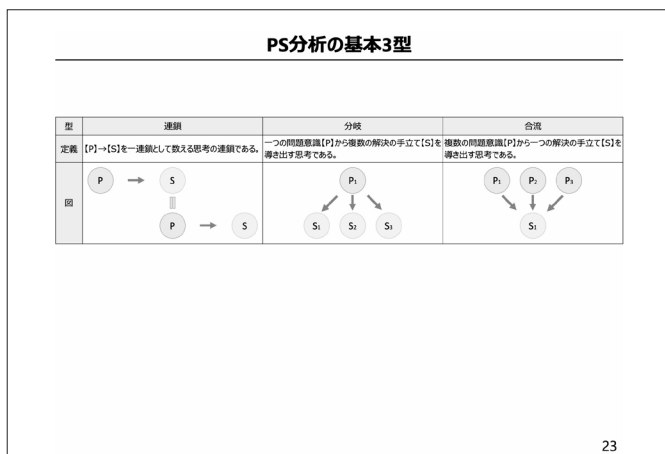


これらの発言を受けて私は、どのように評価していったらいいのかを考え、先ほどご説明させていただいたPS分析を用いて、問題意識をP・解決の手立てをSと分けて、全体を構造図にまとめました。

例えば、先ほどの発言でご紹介したイベント (E)「ソーシャルワークセンターにボランティアに行った」という出来事があり、そこで問題意識 (P)「家で子供がケアに追われている」を抱き、何とかしたいと考える。そのために、解決 (S)として、「ケアから離れる時間を確保する」。すると、「確保するためにはどうしていったらいいのか」という新たな問題が出てきます。



この問題を解決するために今度は「ヤングケアソン開催」「フードデリバリーサービスの提供」というような解決の手立てを考えていく。PとSの関連を図にまとめるとというのはこういうことです。



PとSの構造には3つの型があります。PとSの「連鎖」、1つの問題意識から複数の解決の手立てを見出す「分岐」、複数の問題意識を1つの解決の手立てで考えていく「合流」です。こういったところも今研究として考えております。

分析の結果

結果

- 問題意識と解決の手立ての連鎖によって生徒の学びが深まると共に、連鎖させる主体が生徒自身であることから**主体的に取り組んでいることが分かった。**
- 学びが深まるにつれて、自分一人だけでは解決することが困難な、より高次の問題に対しては、**他者を巻き込むことで解決を図ろうとする姿勢が見られた。**
- 課題解決へのアプローチ方法が、自らが課題に設定した社会問題の認知度を高めるという間接的なアプローチから、**問題の当事者に対して支援を行うという直接的なアプローチへと変容した。**
- 当該生徒が**自己との関りが深い問題から実社会の課題を見出し、よりよい社会を実現するための解決策を導き出して、自ら解決の手立てを実行しようとしていることが明らかとなった。**

24

これらの分析の結果で得られたところでは、やはりこの生徒は主体的に、自分ごととして取り組んでいっているだろうということがわかりました。そして、他者を巻き込むことで、なんとか解決を図ろうという姿勢が見られました。

まとめ

成果

- 子どもの学びの過程に即した評価の仕方を明らかにするための手法として、**PS分析を開発した。**
- **PS分析を用いて4つことが分かった。**
- このことから、**子どもの学びの過程を可視化できると考える。学びの過程は、必ずしも一方に進むのではなく、往復しながら学びが深まることが分かった。PS分析を用いることで、当該生徒の学びを一定、客観的に整理することができる。**

展望

- **まずは、学びの成果ではなくプロセスの評価に活用できる可能性がある。**
- **高等学校での学びを他者と比較可能な形式で、大学入学者選抜に活用できる可能性を見い出す。**

25

この研究を通して、成果としてPS分析を開発したことに加え、子どもの学びの過程はやはり可視化できるのではないかと考えています。

そして展望は、学びの成果ではなく、プロセスを評価に活用できる可能性、また、高校での学びを他者と比較可能な形式で大学入学者選抜に活用できる可能性が見いだせたと考えております。

参考文献

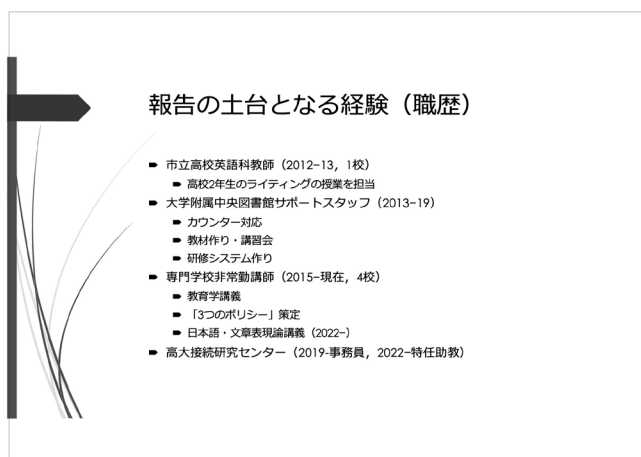
1. 重松憲泰『授業分析の方法』（明治図書出版）、1961年
2. 加藤幸次・安藤輝次『総合学習のためのポートフォリオ評価』（黎明書房）、1999年、p.26
3. 柴田好章『授業分析における量的手法と質的手法の統合に関する研究』（風潮書房）、2002年
4. 二見良海『新QC七つ道具』品質 32巻3号、2002年、p.291
5. OECD Formative Assessment: Improving Learning in Secondary Classrooms: OECD Publishing, 2005, p.24
6. 猪原正守『新QC七つ道具入門—管理者・スタッフからQCサークルまでの問題解決に役立つ』（日科技連）、2009年
7. 高橋広明『QC 的問題解決の中に統計教育を位置づける指導の試み』『統計指導者講習会資料』、2011年、pp.1-18
8. 松下佳代『フーマンス評価による学習の質の評価：学習評価の構図の分析にもとづいて』『京都大学高等教育研究』第18号、2012年、pp.75-114
9. 的場正義・柴田好章『授業分析の方法と課題』『授業研究と授業の創造』（深水社）、2013年
10. 小原裕・辰巳丈夫・川合融『高等学校情報科における問題解決学習の指導法について—品質管理手法・改善活動手法の可能性についての考察』『情報教育シンポジウム2013論文集』、2013年、pp.99-106
11. 森敏昭『学習開発の展開—学習心理学から学習科学へ—』『学習開発研究』8号、2015年、pp.3-16
12. 二宮英一『探究学習における教育評価のあり方』『中等教育の課題に教育方法はどのように取り組むか』（日本教育方法学会編『教育方法』48））、2019年、pp.50-67
13. 西岡山名恵・大貫守『スーパースクールとハイスクールの連携による「標準ルーブリック」開発の試み』『教育方法の探究』第23号、2020年、pp.1-12
14. 柴田好章・石原正敬『名古屋大学教育方法研究室における「授業分析」上「R.方式」の教育評価論としての意義の再検討』『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第66巻第2号、2020年、pp.139-155
15. 大泉早智子『総合的な学習の時間におけるポートフォリオ評価の応用可能性』『高崎商科大学紀要』第37号、2022年、pp.151-165

26

参考文献はスライドの通りです。

「書けない」学生と高大接続（高橋まりな）

本日は現場を出発点とする議論をしようということで、研究として緻密に扱うには壮大すぎる内容だけでも、私が日々の実践の中でずっと考えてきたことについてお話をさせていただきたいと思います。タイトルを「『書けない』学生と高大接続」としましたが、ここでの「書けない」というのは、本人が「自分は書けない」と思っているというパターンと、教員が「この子たち書けないから」と言うような、外から見たときに書けないと思われているパターンの2つを指しています。「書けない」彼らがどんなことを考え、どんなことで苦勞しているのが本日の話題です。



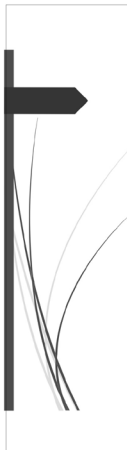
私は教員としては2年目ですので、着任2年目の人にどんな、語るほどの経験があるのかと皆さんもきっと疑問に感じられるのではないかと思いましたので、これまでにどんなことをしてきたかという、職歴のようなものを最初にご紹介いたします。

私はD1のとき、年齢だと24ぐらいのときに1年間だけ母校の市立高校で英語科教師をしました。産休による欠員の穴埋めだったの

で、受け持ち時間数もそんなに多くはなかったのですが、ライティングの授業を担当しました。そして、翌年から大学附属中央図書館のサポートデスクで学生アルバイトを6年間していました。具体的には図書館のアカデミックサポート担当として、教材づくりをしたり講習会をしたり、特に初年次の学生と卒論生の支援の仕組みを作ろうとしていました。また、このサポートスタッフというポジションには大学院生しか雇用しないのですが、多くは修士課程の学生ですので、多様な大学出身のM1が急に講師役をすることになり、しかも2～3年という短期間しか在籍しないという中で、どうやって即戦力として後輩指導ができるようにするのかという、研修を含むシステムづくりの部分にも関わらせていただきました。

同時期の2015年から、専門学校の非常勤講師もするようになりました。同時に4校に行っていたわけではありませんが、合計4校で教育学の講義をしております。大学にならって3つのポリシーを策定したいといった要望があると、相談役のような形で、専門学校のカリキュラム開発に関わらせていただく機会もありました。最近では「日本語」や「文章表現論」といった、いわゆる国語教育も担当しています。

高大接続研究センターには、特任助教としては今年度が2年目ですが、2019年からプロジェクト・アソシエイトという名称で所属しています。



英語科教員をして気づいたこと

- 英語教育における「日本の例文主義」・例文から借りる「書き方」の範囲
 - いわゆる構文、当該単元の学習項目
 - 話題の選び方
 - (道徳的な) オチ
- センター試験対策としての文法学習・試験
 - 「意味が同じになるように」のような特殊なルール
 - 論理的な文章構成に対する一定の理解

→ 例文の適切な活用方法を学んでいない(自分で考えるのをやめてしまう)、
特殊なゲームへの適応力育成の難しさ、
書き方は手順の形で教えられるのかという疑問

では、本当に1年だけですけど、私は英語が教員をしたときに気づいたことをお話させていただきたいと思います。それ以前に私は「英語教育における日本の例文主義」というトピックを2つの文脈で聞いたことがありましたが、それを学生として学んだときには、重要性を理解できませんでしたし、眉唾だと思って聞いていたところもありました。この文脈の1つは、アジア系の学生はなぜ剽窃をする

のかという英語圏の先生たちが書いたもので、ある部分差別的な認識を含んでいると思いますが、ともかくそこには、東アジアの学生は英語を学ぶときに例文を写すようにしながら勉強するので、自分の都合で一部を変えて書くことを悪いと思っていないから、剽窃とそうでないものをそもそも区別できないと書いてありました。それが1つと、もう1つは英語科教育法の文脈で、日本では英語学習を例文主義でやっているから、自分で考える力は英語の学習の時間の中では身につかないということでした。

個人的には、そんなことはないという気持ちで現場に行ったのですが、実際には、例文から借りる「書き方」の範囲が、その単元で学ぶことになっている構文などの学習項目だけにとどまらないという状況に直面することになりました。私の指導力不足もあり、例えば話題の選び方とか道徳的なオチみたいな部分まで全部まるっと模倣して書く生徒が多く、ライティングの授業だぞと言って教科書を使って勉強させると、仕上がってくる作文がみんな似通ってしまうということを課題だと感じました。

それから、どうしてもセンター試験対策としての文法学習がライティング授業の半分以上を占めていて、その対策の授業では、4択で答える問題集を宿題で解かせて授業ではひたすら答え合わせと解説をしていました。そうするとその中で、例えば、「意味が同じになるように書き換えなさい」というような指示をすることがあって、冷静に考えると、表現が変わったのに意味が同じっていうことはないんじゃないかとか、そういう疑問を持つ余地のない特殊なルールの中で書き方を教える難しさを経験しました。

もう1つ気がついたことで、これはうまくすれば役に立つかもしれないと思ったのが、論理的な文章構成というものに対して、センター対策のときだけ理解する子たちがいるということでした。どういうことかといいますと、例えば、論理的な文章になるように不要な一文を抜きなさいとか、論理構成上適切な場所にこのパラグラフを挿入しなさいというような操作を、英語の時間だけ何故かできるんだけれども、ちょっと日本語でものを書かせると全く論理的に書かない生徒がいるということです。あれは一体何を学んでできるようになっているのだろうかということを、当時はかなり深く考えていました。

こうした経験をして、引き続き考えていかなければならないと感じたのが、まずは例文の適

切な活用方法を学んでももらわないといけないということでした。自分で考えるのをやめて踏襲で答えようとするのを、どうしたら阻止できるのかということです。時間の都合で端折りますが、スライドの最後の「書き方は手順の形で教えられるのか」という疑問も、このころに考え始めて今でもずっと考えていることです。

大学附属図書館で私が勤務していたサポートデスクは、図書館に当時新設されたラーニングcommonsの一部でした。探究的な学習という言葉と親和性が高いと思うのですが、学生が自ら主体的に学んでいこうとするのを図書館としても支援しようということで、できればTAをおきたかったのだけれど、予算の都合やいろいろな事情があって、ワンストップサポートとして何でも屋さんの大学院生を

何人か置いておいたらどうかなるだろうという、そういう成り立ちの部署です。立ち上げから数年経っていましたが実質立ち上げメンバーのように参加させていただいていたので、いろいろな経験をしました。

私たちの担当するカウンター対応は、レポートの書き方やプレゼンの仕方、論文の探し方等の相談役という想定だったのですが、実際に相談に来る学生たちの困りごとは、主に先生たちとの対人コミュニケーションについての悩みでした。また、日本語のネイティブチェックの相談もたいへん多く、これは大学のサポートが手薄だったんじゃないかなと私は思っているのですが、日本語を書いてもチェックしてくれる人がどこにもいないから頼むよ、という人たちがよく来ていた印象です。

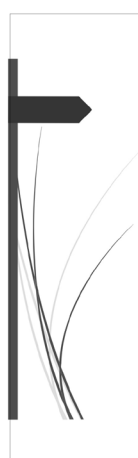
ライティングに関わる悩み相談が多かったのは、試みているが書けないという「書けない」と、書くこと自体に取りかかれないという「書けない」の2つでした。自分が教員をしているわけでもないのに、とてもたくさんの人から「書けない」という相談を受けることになって、これはとても貴重な経験だったなと今になって振り返ると思います。

どういうときに「書けない」と感じているかですが、書き方が単にわからない。手順を学んだら書けるかもしれないけれど、そ

れを学んでこなかったので書き方がわからない。それから、先生からの指導が理解できないというパターンもありました。また、これは非母語話者にも多いケースでしたが、正確な日本語が書けない結果読んでもらえない。誰かにみてもらってマトモな文章になってから来なさいと先生が言った、という相談もよくありました。あとは、高校までと評価基準が変わってしまって、身に覚えがないのに成績評価が低いというもの。自分はずっと作文が得意でずっと自信を持っていたのに、大学に入ったらレポートの評価にCと書かれてしまって、でも自分ではなんでCなのかわかんないというような相談もありました。

書くこと自体に取りつかれない学生が訴えていたことなかで、私がいまだによくわからないのは、良いレポートの見本がほしいという主張です。では仮に、先生が良い点数をつけたレポートを見ることができればあなたはそれを模倣して評価の高いレポートが書けるのか、自分自身の模倣力に本当にそんな自信があるのかというのが私にとっては謎ですが、「どうするつもりなのかかわからないが見本をほしがる学生」がすごく多いというのは今でもずっと感じています。それから、「何を書けばいいかわからない」とか「レポート課題を理解できない」といったことは、高大接続とライティングに関する本を読んでも、いろいろな大学の調査の中に出てきますので、同様の主張をしている学生がどこにでもいっぱいいるんだなという印象を私は持っています。

あとは、書きたいこと・言いたいことがないという主張も実はすごく多くて、先生が何でもいいと言っているが私は別に言いたいことも書きたいこともない、感想はない、意見もないという。これは、先ほどまでのお話にあったような「主体性」がないということなのか、それとも、やってみても全然肯定的に評価してもらえないからじゃあもういいよと投げ出しているのか、或いは本当に何も考えていないのかわかりませんが、そういう相談はありました。あまりに苦手意識が強すぎて、どうしてそこまで追い込まれたか私にはわからないんですけど、書こうとすると涙が出てくるばかりで何もできないっていう相談もありました。当時は私も自分が代わりに追いつめられるような気持ちがあって精神的に辛かったのですが、こんな学生がたくさんいたことで、この子たちはいつからこうなっちゃったんだろうということも考えるようになりました。



専門学校での国語教育実践

- 「書けない子」は本当に書けないのか
- 読書を推奨している理由
- 本音を書くようになるまで
- 書き言葉の感覚的理解
- 対応に苦労しているポイント
 - 箇条書きができない／まとまった量の文章が書けない
 - 段落分けができない
 - 適切に引用できない
 - 書くことがない

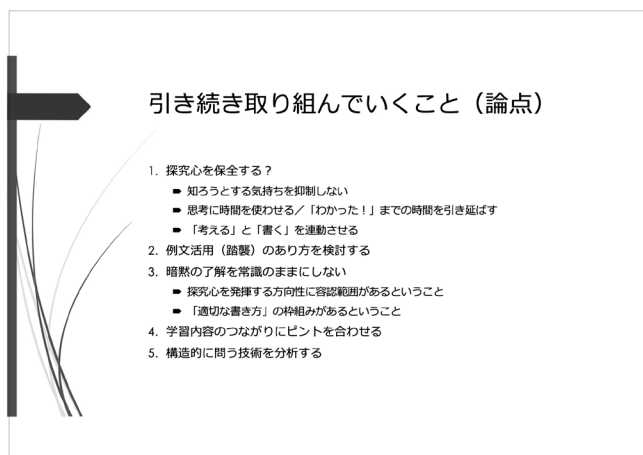
最近では、専門学校で国語教育を担当するようになりました。

学校の方から「この子たちは書けないから、先生どうぞなんとかしてください」って言ってくださることもあるのですが、まずは、書けない子が本当に書けないのか、どういう意味で書けないのかを調べるところから始めました。先ほどのサポートスタッフの経験とも重なるのですが、本人たちが自分

自身についてどう思っているのかを聞き取ってみたり、或いは実際に書かせてみてどの程度なのか様子を見たり。まだ始めて2年なのでわかっていない部分も多いのですが、じわじわとわかっ

てきたというところですが。「書けない」対策に学校の先生たちは読書を推奨して、読めば書けるようになるって意見もあるんですけど、たぶんそうではないだろうなということを感じながらやっております。

そして、ここまでのところで、自信を喪失してしまっている学生の話を少しさせていただいたのですが、書かなくなってしまった学生に本音で書かせようと思うと、こちらが手間暇をかけるしかないようなところがあります。どうしているかという、リアクションペーパーを数学の試験問題のようにして、カッコ1から順を追って書いていけば最終的にある程度の「意見」が形成できるように作ります。そして授業では具体例を挙げながら少しずつ書かせ、毎回それにコメントをつけて返します。こうしたやり取りを続けるうちに、このテーマで考えろと言えば、仕方なくかもしれませんが考えてくれるし、書けと言えば書いてくれる関係になっていきます。



引き続き取り組んでいくこと（論点）

1. 探究心を保全する？
 - 知ろうとする気持ちを抑制しない
 - 思考に時間を使わせる／「わかった！」までの時間を引き延ばす
 - 「考える」と「書く」を連動させる
2. 例文活用（踏襲）のあり方を検討する
3. 暗黙の了解を常識のままにしない
 - 探究心を発揮する方向性に容認範囲があるということ
 - 「適切な書き方」の枠組みがあるということ
4. 学習内容のつながりにピントを合わせる
5. 構造的に問う技術を分析する

こういうことをしながら、今自分の中で引き続き論点として取り組んでいこうとしていることがこのスライドの内容です。

まずは、探究心を保全すると書きました。一見やる気がない学生たちも、自分で考えようという気持ちが全くないわけではないと思うのです。ただ、何かが邪魔をしてそこに集中できないんじゃないかという印象がありますので、まずは知ろうとする気持ちを抑制し

ないとか、あとはゆっくり考えていい時間を、講義の中でも作りたいと思っています。

学生によってはぱっと調べてぱっと結論にたどり着きがちなので、私が最近取り組んでいるのは、わかった！となるまでの時間をできるだけ引き延ばす工夫です。学生の探究心が失われないようにしようとしているのか、それとも無理やり絞り出させようとしているのかがちょっと微妙なところなんですけれど、試みています。

それから、例文活用のあり方の検討です。私を見る範囲ではありものの踏襲で課題を済ませようとする場面があまりに多いので、その子たちは探究学習の中でも、例えば高校で自由研究みたいなものをやらせてもらっても、その前の学年の子たちの様子を見て似たようにやっているだけだったのかもしれませんが。本当の意味で自分で書く・考えるというのがどういうことなのかを、私自身も考えなければならぬと思っています。

そして3つ目に、暗黙の了解になっていることを常識のままにしないことが必要だと思っています。例えばテーマ設定で、探究心の発揮の方向性には容認範囲があります。特に大学がそうだと思うのですが、何でもいいよと言っておいて、実は何でもよくはないということ、どうしたら説明できるのか考えています。また、書き方にも適切と思ってもらえる枠組みがあるので、どんなふうに書いてもいいのではなくて、こういうふうに書かなければいけないということ、その理由、どうすれば対応できるのかといったことを伝えなければいけないと考えています。

大谷尚先生からのコメント

大谷：今村先生って名大附のご出身でしたよね。

今村：はいそうです。

大谷：今村先生は卒業なさったご自分の学校に帰ってきた感じがしましたか？それとももう自分が出たときは全く違うことやっていると感じがしましたか？

今村：半々ですね

大谷：その「半」はそれぞれ、ご自分の教育実践にどう影響しましたか。

今村：まず、アットホームな雰囲気、いろんな個性を持った人たちがたくさんいるっていう点は、変わらないなっていう思いがありました。ただ、僕らが生徒でいたときは、研究開発をガツガツとはやっていなくて、のんびりやっていたんですね。だけど、先進的な取り組みとして世の中でまだ全くやられていないような総合人間科っていうものが設定されて、私は自分ではその経験をしてないので、ここへ来て勉強して実践者になるっていう意味では、本当に研究開発校なんだなと思いました。

大谷：はい。なぜそんなことを伺ったかという、2021年のこのセンター主催のシンポジウムで「受験学力形成を目指さない中高一貫教育は研究者養成にどう貢献するのか」をテーマに、名大附出身で大学の先生や研究者になっている方たちにパネリストになって頂いてお話を聞いたとき、そのまとめにこんなことを書いたんです。それは、名大附は独特の文化を持っていて、教育によって生徒を育む、ということとともに、学校の文化が生徒を育むということがあるんだということです。主体性なんて、いくら教育しようと思っても、その文化ができていないと、一人ひとりの先生が何かやろうとしてがんばっても、子どもは変わらないわけですね。そもそも名大附は先生方が主体性を持っているんですね。他の人が変わったことをしていても絶対に足を引っ張らないので、独創的なことをする人が先生にもたくさんいます。

研究開発校になったのは平成7年の総合人間科からですね。だから1995年だと思うんですけど、当時の校長の安彦忠彦先生が、そのあとで始まる総合的学習の教育課程開発の先導的試行を獲得してやったのが最初で、一年間に600人の見学者が来たとか聞きましたが、先ほどのインタビューの話もありました。今村先生が生徒のインタビューの依頼でときどき大物が捕まるっておっしゃいましたが、ノーベル賞の益川先生に電話して、いいよって言われて会いに行った子がいるんですよね。その時はさすがに副校長と私がかっついて行きました。本来はついて行かないんですが、自分が益川先生にお会いしたいから行ったんです。それをきっかけにそれまで学校から依頼をしてもお引き受けくたさなかった益川先生が講演をしてくださることになりました。それからこれは中1だったかな、職員会議で出た、誰がどこに行くっていうリストの中に「某

テレビ局アナウンス部長」というのがあったんですよ。今でも覚えています。これは何だろうと
思ったら、テレビ局のアナウンサーは、社内規程でそういうインタビューは受けないのだそうで
す。しかし、電話をかけてきた生徒の話の聞いていると、これはどうしても会いたいと思った。
それでアナウンス部長がそれを受けのけど、絶対テレビ局の名前を出してくれるなど。だから資
料にも「某テレビ局」と書いてあったんです。

つまりですね、もう、この電話をかける段階で、問題意識とか課題意識のようなものが自分か
ら引き剥がされないほどを育てているというか、個と一体になっているんですね。それが大人に
結構影響を与えていて、私は校長時代にそういう話をたくさん聞きました。

柴田先生がいらっしゃる教育方法学講座を作った重松鷹泰先生が、「生き方が育つ」という言
葉を使っています。以前にその教育方法講座の教授でいらした日比先生が、「生きる力を育てる」っ
てよく言っているけれど、そうではなくて「生き方が育つ」ののではなくてはならないってこと
をおっしゃっているのが、まさにこれなんですよ。名大附のやり方っていうのは、「生き方が
育つ」ようにする。このことは結局、卒業までの3年ないし6年をかけてどう生きていくのか
を考える、ということなんですね。

だから、題材としては「生き方を学ぶ」「生命と環境」「平和と国際理解」となっていますが、さっ
き今村先生が自分のテーマに引き寄せていいんだっておっしゃいましたが、結局自分のテーマが
あればそちらに引き寄せざるをえなくて、しかもそれに対して、「それは『生命と環境』ではな
いじゃないか」みたいなことを言って足を引っ張る先生は、名大附にはいないんですよ。そうい
うところでやっぱり、何ていうのかな、「生き方が育つ」んだと思うんですね。

中3だったらこれをやらなきゃいけないとか、高1はここをやってなきゃいけないみたいな
枠をはめない、枠の方をその子に合わせてその子がその枠を変えることを認めているというか、
むしろ応援するんですね。そういう文化が、一体どうやって学校の中に育まれるのかということ
に私はすごく関心があって、「高大接続型学力とその形成過程・環境」という名前です。呼んできた
んですが、いまだによくわかっていません。

生徒たちがフィールドワークから帰ったらお礼状を書くんですけど、お手本もあって、こんな
ふうには書きましようとか、イラストつきでこうお辞儀をしてご挨拶をしましようとか、結構かわ
いいんですよ。中学生相手に教えるので、そういうことはそういうことでちゃんとやっている
んですね。野放図に放任しているわけではないんですよ。なんかそういうところに、何とも言え
ない独特なことがあって、それをなんとか概念化したり構造化したりしたいと思っていたんです
けれども、いまだにうまくできないところはありますね。

それから生徒が論文を書くと言っていました。私が校長だったときに国際バカロレアの研究
助成を文科省から全国5校のうちの1校として取って、そのとき私は申請書に、国際バカロレ
アにあるものは全部名大附にある、1つだけないのが Theory of Knowledge, TOK だからそれを
研究しますって書いて通りました。国際バカロレアには例えば Extended Essay というのがあ
りますが、文字数では名大附の生徒のレポートの方がはるかに長いんですね。もう Extend Essay
どころの騒ぎじゃない、Super Extend Essay を書いているわけです。そういうものが書けるのも、
いきなり書かせているわけではありません。

今村先生も言っていました。大学に入ると遊んじゃうのではなくて、やっと自分の好きなこ

どが思いっきり学べるということになります。名大附は早くに推薦で大学に入学が決まる子が多いです。私が校長をしていた頃でもそうでした。そして推薦で決まっても全然遊ばないんですよ。学校によっては「受験は団体戦」などといって、推薦で決まる子は敵前逃亡で前線に出ている兵士に悪影響を与えるみたいな考え方があります。だから、「基本推薦なし」みたいな公立高校が多いわけです。しかも、文科省は推薦で決まる時期を、これまで規定がなかったのに高大接続改革で12月1日以降にしると言ったわけですけど、名大附では推薦で決まった子が遊んじゃったなんてことは聞いたことがありません。つまり、推薦で決まると遊んじゃうのは高校の教育が悪いんですね。そのような悪い体制に基づいて、その推薦の発表を後ろにしるだなんて言っているのだから、日本はひどくおかしなことをやっていると感じています。

それから立命の西浦さん、さっきのヤングケアラーの例は、ちょっと私聞き逃しちゃったんですけど、そういうものを出願のときに書いた学生のエントリーシートをどう評価するかという話としての例でしたか？

西浦：いえ、実際に高校の探究的な学びの中で生徒が発表したときの発言です。

大谷：わかりました。まず、西浦さんのお話とは関係ないかもしれないのですが、主体性とか探究力とかの評価について私が一番疑問に思っているのは、それを評価して入学させたらそれを生かした授業ができるのかということなんですね。これはバカロレア入試をやっている大学で実際に起きていることで、実はこの間バカロレア入試をやっている大学の、バカロレア入試のアドミッションオフィサーにインタビューをしてきたんですけど、そこは長期にわたって様々な取り組みをし、なかなかうまくいっているんですが、そんな大学であっても、入っただけでやめちゃったっていう子を私は知っています。それは国際バカロレアのような、日本の通常の学力とは違う学力をつけて入ってきた子は、それを発揮する機会が与えられないと、そんな大学には居場所がなくなってしまうということです。

もちろんこれは3つのポリシーというものがあって、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーってなっているのだから、連続的に整えられるべきものなのですが、こんなものはだいたい単なる作文ですから、実際には、教えている人も評価の方法も、講義の方法も変わらないのです。入試で仮に主体性とか探究力を測れたとして、そういう子たちを入学させたら今度は大学が困ることになるので、これは非常に危ないことになるなと思っています。幸か不幸かそんなものを測って入学させる仕組みはまだうまくいっていないので、そのおかげでなんとかなっているんじゃないでしょうか。

それからPS分析について。「可視化」という言葉を使っていっちゃって、たぶん「客観化」でもあるのだと思うんですけど、名大附の話と対比的に見ると、名大附の場合は最終的に、これからどう生きていきたいのか見出すのだけれど、西浦さんがさっき分析された例にはこれからどうしたいのかがあまり書いてありませんでしたよね？もしどうしたいのか書いてあったら、それはどう分析できるのかなという点が気になりました。そして、「学びの過程を可視化した」というふうにおっしゃっていますが、少し意地悪な言い方をすると、「学びの過程を可視化した」のではなく、「自己の学びについてのナラティブを図式化した」のではないかと思うんですね。

その子の学びを西浦さんが見ていらしたわけではないですよ。そうだとするとそこに、高橋さんがおっしゃった道徳的なオチとかですね、そういうものが意図的・無意図的に入っている可能性があるのも、それも可視化する必要があるわけですよ。排除しろということではなく、むしろ積極的に可視化していかなくちゃいけない。そうなると、例えば大人の手が入っている部分も可視化しなくちゃいけないわけですけど、それをどう評価するのか問題というがあります。特に西浦さんはアドミッションオフィサーだから、もしその出願書類をこの方法を使って評価するとなると、そういう課題が出てくるんじゃないかなという感じがしました。

高橋まりなさんと私は同じオフィスにいたんですが、今日の話は断片的に聞いたことはあっても、全体としては聞いたことがないものでした。

私の作った SCAT という分析手法が日本語教育研究でもよく使われているので日本語教育の論文を結構見るのですが、日本の例文主義という話に関連して、旧共産圏のどこかにもっとすごい国がありました。正しい作文には見本がなければならず、その見本の通りにかけたものが良いというようなものらしいです。さきほどオンラインで参加していらした名大の渡邊雅子先生はフランスがご専門で、バカロレアの試験の答案には書き方があるっていうことでしたけれども、それはその国の論述の文化を反映しているということだったと私は理解しています。しかしこの某国の「正しい作文」はそういうのではなく、規範・模範みたいなものがあるんです。例えば、渡邊先生も先日のシンポジウムの話だと、革命はまだ終了していないのでフランス革命を続けていくためにバカロレアが必要なんだというような歴史的な背景があるということでしたが、そうじゃなくて、何かこう、教条主義というか規範主義みたいなものがあって、だからそういう意味では日本よりすごいなと思いました。こういうものが、一人ひとりの子どもの学習を阻んでいるってうか、本当に学びたいと思っている子たちがその意欲を失わされているのが学校だって灰谷健次郎が書いていましたが、たぶん言語ゲームのルールがあるんですよ。ちゃんと書けているはずなのに評価がもらえないみたいなのは、あるルールがあって、大学には大学のルール、高校には高校のルールがあるんだけど、一人一人の先生にもルールがあって、先生はそれを自覚していないものだから、その言語ゲームのルールというものを暗黙のうちに押し付けているし、押し付けていることすら自覚していないわけですよ。それがたぶん学びを阻んでいたたり、学ぶ意欲を失わせていたりする。そういうことに光を当てていくことが大事だし、そういう視点で見ると名大附の教育ってどうなのか、その阻むものはどうなっているのか、ないのかあるのか、どう調整されているのかっていう見方が改めてできるなと思って、今日のこの3つの報告は何かくっつとつながる感じがして、非常に面白いと思います。

大塚雄作先生からのコメント

私自身は自分が受けた教育をそんなにおかしくないと思っていたので、教育改革ということでこのところ叫ばれていることに対しては、なんで今頃言い出すのかなと感じておりました。名大附の実践は、私自身も経験したような教育で、それが実際にもう長い間積み重ねられてきているんだなということを改めて感じましたし、そういう教育を実践してきている学校が日本にもあるということは、ぜひ広く共有しておきたいと思えますし、また、自信を持ってこれからも進めていってもらえればと感じました。

西浦さんのお話については、立命だからできるということもあるのかもしれませんが、学習のプロセスを評価してもらいたいという思いは多くの人々が持っていて、ただなかなかそこが難しい。PS 分析に対して、大谷先生からも指摘がありましたけれども、さらに詰めていってよりよい方法にしていただければなど、可能性は感じました。入試の観点から1つコメントすると、たとえば学習のプロセスを可視化して選抜に利用していくというときに、初めて利用するときには効果があると思うのですが、入試というのは毎年つながっていくものですから、こういうやり方で選抜するとわかった途端、何か別のファクターがそこに関わってくるという、悪い波及効果が起こるといことは常に留意しておく必要があるかと思えます。大谷先生は質的な分析の先陣を切っておられていて、先ほど紹介のあった SCAT も、今うちの大学の卒論や修論でもあちこちに出てきます。そのたびに大谷先生のお顔が浮かぶのですが、そういうような形で少しずつ広めていただけたら、入試にも一石を投ずることにもなるのではないかと思います。

名大附と聞いて私がすぐ思い出すのは藤井聡太でありまして、ああいう飛び抜けた人がいるところだなというイメージがありますし、立命館大学ももちろんトップの私立大学でありますので、そういう意味で言えば、大学入試センターで共通テストを担当してきた立場からすると、日本全体の高大接続という視点に立ったときには、学生の多様性にどう目を向けていくのかということが1つの論点になるかなと思います。その点で、高橋先生が、文章の書けない生徒さんたちに接しておられるというのは、また別の1つの集団を代表している事例かなとも感じました。

そういうことで言えば、私の経験になりますけれども、メディア教育開発センターにいたときに、いわゆる早期入学の取り組みの一環として、放送大学の授業を高校生に開放するプロジェクトに関わったことがあります。放送大学は幕張に本部がありますので、千葉県周辺の優秀な高校生を集めて実施したのですが、優秀な生徒のなかにも、学期末テストで満点を取ってしまう生徒もいれば、一方で授業が難しくて自信を喪失してしまう生徒もいたんですね。大学では理系の学部に進んで研究がしたいというような思いを持っていた生徒が、その水準に達していなかったと言ってしまうまでですけれども、ある種の探究活動を経験する中で自己効力感を失っていくというか、自信をなくしていくというような事例もありましたので、これも多様性の1つとして注意すべき点かもしれません。

京大にいたときにも、京都市立堀川高校と京大の情報処理センターが連携して実施したプログラミングの交換授業で、同じようなことがありました。高校生の発表もなかなか面白いものが多いと私は感じましたが、後で聞いてみると、やはり京大生の発表を見て自信がなくなったという生徒もいたようです。アドバンスト・プレイメントの良さに注目するだけでなく、個人差があ

るので、多様な参加生徒の自己効力感をいかに育てていくかという視点にも注意をする必要があると感じました。

それからもうひとつ、自分が問題意識を持ってそれを解決しようというときには、解決に必要なツールがそろっている必要がありますね。たとえば私自身が教育心理学の領域で研究に取り組む際も、研究を進めるためには様々なツールを学んでいかなければいけません。高校生のレベルでそれを学ぶとなると、たとえばデータをどう集めるかという調査法や、データの統計分析の方法を勉強したりということが求められるかと思いますが、それをやり始めると、わからなくなって自己効力感を喪失してしまう、というようなこともあるのではないかと思います。

こう考えると、先ほどの名大附属の取り組みは、高校時代の探究学習としてたいへん適切なレベルで実践されている印象があります。自分の生き方はこんな感じかなというぼやっとしたものでもって自分の意欲を高めていくという目標がある、ということでしたね。大学の場合にはツールもしっかり身につけなければならないので、この観点から高大の接続部分の連続性がどういう形であるのが望ましいのか、というのは1つの論点になりそうです。必ずしも接続する必要はないのではないか、つまり、高校のときに関心を持ったことを大学でそのままできるかということもなかなかそうもいかない部分もありますから、そうであるということも高校の段階或いは大学の段階でどう考えていくかということも1つの課題になるかもしれません。

先ほど大谷先生から渡邊雅子先生のお話が出ましたけれども、私はよくは知りませんが、フランスでは高校に哲学の授業があって思考の型をしっかり植えつけるということを聞きました。その素地があるからこそ、バカロレアの哲学の試験で4時間もかけて書かせる試験というのが可能になるということで、高校の教育があってこそ、そのような試験になっているのだなと思いました。例文主義の話で出てきたようなこともあるのだろうとは思いますが、やはり型をしっかり身につけるということがある意味で大事なことになっていく可能性もあると思います。その辺が、多様性の問題と絡めて、どう効果的に働いていくのかということもちょっと気になるころではあります。

松下晴彦先生からのコメント

名大附は伝統校でもありますが、今村先生が赴任されたときから既に、今の探究につながる、時代の先端に行くようなカリキュラムがあったこと、そして地道に取り組んでいくといずれ評価されるというその辺りの事情がよくわかりました。附属の卒業式ってすごく楽しくて、スライドで1枚1枚、個性豊かな生徒さんの活動が数秒ずつ紹介されるのを私も拝見しました。あれにはまさに6年間の一貫教育の、カリキュラムの成果というものが出ていたのかなと思います。ただ一方で、この子どうしちゃったのかなというスライドもあったりして、うまくあの文化に乗られる生徒さんもいますし、そうでない生徒さんもいるということで、学校教育文化にはなかなか難しいところがあると思います。

今私のいる大学の、クラブに熱心に取り組んでいる体育会系の学生の話なんですが、私の授業で私の小難しい話を聞くとその途端にうつむいて、紙に向かって一生懸命書き始める学生がいます。どうやら鉛筆を使って紙に書き込んで、それで頭の整理をするというのを習慣にしているようです。曼荼羅チャートでしたか、自分の目標を明確化し、自分の今いるところをマッピングして可視化するというのを大谷翔平選手が習慣にしていると知って、思考や理解を明確にするために自分でも始めたのだそうで、それぞれの個性でもってその学び方を選んでいると知ると、ちょっと感慨深いものがありました。

また別の体験談で申しますと、高橋さんの発表すごく面白かったんですけど、渡邊先生が退室されているのがちょっと残念ですが、ちょっと関連する話があります。今は高校も生徒集めに必死ですから、さまざまなニーズに対応するために、たとえば昼夜開講の定時制とか、いろいろな仕組みを用意しています。以前そういった高校の授業参観に行ったときのことで、その学校は3分の1の生徒は進学、3分の1は就職、残りの3分の1はどちらか進路に迷っているというようなところ。いろんなタイプの学生さんがいますので、先生もいろんなメニューを高校の授業として用意して、また生徒が自主的にカリキュラムを選択できるようになっていました。参観したのは文章の作成の仕方を教える1時間の授業で、どこかの会社にアプライすると仮定して志望動機を作文するというのがテーマでした。結局、型がないと進めないのが教師が提示するんですけども、その授業を見ていろんなことを考えました。もともと日本の寺子屋文化では、往来物を使うんですね。手紙のやりとりや公文書の作法を学ぶために、まずは模倣から入っていきます。とことん自分の腕を使い手を使って真似をしたところで自分のものになっていく、という考え方ですね。現代の高校の先生が自分で工夫して文章の書き方を教えようとしたら、志願書やら手紙の書き方から始めようとなったということで、(寺子屋文化と)何かしら共通するものを感じて面白いなと思いました。

今日のテーマである探究に移ります。私はジョン・デューイやアメリカ分析哲学を専門にしている、昨今の探究的な学びっていうのはデューイだとか、それから最近ですとMITのレズニックとか、その類の研究をベースにしているんだろうと想像されます。昨今のどんどん可視化・評価するということばかりが強調されると、探究そのものを培う基盤となっている、根底にある、本当に真に求められている力はどうなるのでしょうか。先の附属の実践ではそこが本当に重視されていることがわかりました。さっき大谷先生は「生き方が育っている」とおっしゃいましたが、

課題が生徒の個性と一体化しているということでしたね。表現されたり言葉にできたり可視化されたりするものの根底にある生きる力がいかに育つかというところがやっぱり重要で、これはいわゆる ineffable なものといいますか言葉にならないものとして重要だと思います。他方、柴田先生の研究室はそれをいかに可視化したり分析対象としたりするかに取り組まれています。可視化していく努力の一方でそれでも可視化できない部分をどういうふう大切にしているのかというところが重要ではないかと思っています。

先ほど大塚先生が藤井聡太さんの話をしていました。藤井さんたちのような個性豊かな人たちの場合好きなものには本当に直観的で飛びついていて、あとはもう勝手に体が動くというような域に達していると思うんですね。これは非常に極端な個性化なんですけれども、こういった次元を我々がどのように仕掛けたり対象化できるのかという、そこが問われているのではないかなと感じました。

私達は日本語で漢字を使います。これは漢語からの借り物で私達のものではありません。ところが、これを獲得しようとがんばっているうちにだんだん自分の言葉にもなり、それから独自の言葉が生まれる。アートをやっている人たち、作家とかライターとかそういった人たちは、借り物であったものをいかにして自分のものに変え自分のものが出せるかというところで勝負しています。生きる力の中心となる言語やメディアの修得と活用と個性化との関連を視野に入れると、今後、何を 21 世紀型のリベラルアーツと捉えていくべきなのか、生成 AI が人間の知性に置き換わろうとしている世界で、どうしたら自分の言葉というものを育み、大切に、表現する力を持てるのか、それはいつ身体化されて暗黙知になっていくのか、そういったことを絶えざる課題として探究し続けることが大切だと感じました。

村上隆先生からのコメント

他のコメンテーターの先生方とは違い、私はもはや教育という場を離れておりますし、それからアドミッションの場もはるかに離れておりまして、今日伺ったようなお話は、なるほどなとは思ったんですけども、必ずしも自分ごととしてはとらえられないところがありました。

探究的学習というものについて、小中高の総合的学習が始まった時期にはなかなかとんでもない状況が続いていたように思うのですが、名大附は導入が早かったこともあって最初から比較的なめらかに進められてきたのではないのでしょうか。他の一般の中学高校でも、当初お仕着せであったところから形を成してきているのか、詳しいことは把握していませんが、なじんではきたのかなという印象を持っています。

それからアドミッションポリシーですが、これは私も現役時代になんでこんなことを急にやらされなくちゃいけないんだと、アドミッションとカリキュラムともう1つ、ディプロマですか、3つのポリシーがつながっていなくてはならないなどと、当時は冗談じゃないという感じでしたが、こちらもともかく形は成してきたということなのかなと思っています。ただ、そういうものが、ひとつは大学側から見たときに大学のためになっているのか、それから入学してくる学生諸君のためになっているのか、さらに大学を目指して勉強している人たちの役に立っているのかということになると、非常に疑わしいという気がしないではありません。

共通試験はちょっと落ち着いてきたようではありますけれども、最初の年の数学1Aなんて、私は自分で解いてその経験談を文章にもしましたが、結局は昔に戻っているだけじゃないか、昔風の勉強をしないとなかなか点数の取れないような試験になっているんじゃないかと感じました。私が知らないうちに何かが進歩したのか、それとも進歩していないのかということが、どうもよくわからないという感じを持っています。

他の方にならって探究的学習に関わる体験談をお話ししますと、私は中京大学に移ってからドラゴンズプロジェクトというのをやっていました。これは中日ドラゴンズとナゴヤドームの了解を得て年に1回、ドームに行ってお客さんに質問紙調査を行うというものです。私にとってこれはまだに助かっているもので、そのデータを使ってまた今年も学会発表をしようなんて思っています。学生にとって何の役に立つのだろうかとしばらくは思っていました。先ほど大塚先生もおっしゃった通り、心理学では研究方法についてかなり決まった型のものを習わなければならない、そこで役立っているだろうと思います。最近出版された『科学としての心理学』（ディエネス、Z. 著 石井恵子・清河幸子（訳）新曜社 2023年、原著刊行は2008年）という本を読んでいたら、心理学において、統計教育が一番退屈なクッキングブックのように教えられているという記述がありました。これは2008年のアメリカの話なので、かの国でも、この時期になってもこんなもんだったのかと思ったわけですが、社会調査を行うためにもある程度クッキングブック風に、統計学を教えなければなりません。ドラゴンズプロジェクトでは、2年生と3年生が主体となって現場で調査をし、最終的に3年生がドラゴンズのスタッフの前で発表をしていたのですが、調査のデータを分析するにあたっては最低限であるにしても統計学が必要になります。そうすると、ある程度は統計学というものも単なるクッキングブックというような感じではなく学べるようになっていたかもしれません。

それからもう1つは書く方の話ですけれども、これは戸田山和久さん、今名大を離れられて学位授与機構にいらっしゃるかと思いますが、戸田山さんの論文の書き方の本がありますね。中京大学の仲間内で話をすると、この本はちょっと難しすぎるという話にもなっていました。この本がかなり役に立ったように思います。アカデミックライティングでは、思った通りに書くなんていうことはやっぱりないわけで、この本では、心理学ほどは型にはまっていないけれども、問いと答えとその根拠を書かなければならない、それ以外のものは書いちゃいけないという指導から始まるわけですね。典型的に下手な論文はこう、という例が示されて、それをどうすれば改善できるか解説する形で書き方の型を身につけさせていくという構成の本でした。中京大学の探究学習ではドラゴンズプロジェクトとこの本の2つが役に立っていたのではないかと思います。

ただし高校で似たようなことをすると非常に難しいと思います。理由のひとつは発達段階の個人差が中等教育段階では非常に大きいということですね。大学生でも入学直後はそうです。昔よく今の学生はとんでもない行動をするという話を旧教養部の先生から聞かされて、そのときはこの先生は大げさなことをいう人だなと思って聞いていたのですが、教養部改革があって自分でも学部1年生とつき合わなければならなくなってみるとどうやらあれは、大げさに言っていたわけではなかったと実感しました。そうは言っても大学は比較的同一性の高い学生が入ってきますから、高校と比べるとどうにか教えられるということがあるかもしれません。実際、先の戸田山先生の本には、「最近の学生は問題意識がなくて困る」という教員がいるけれども、そんなものはなくて当たり前、「ある振りをしろ」と書いてあります。入学後一定期間が過ぎた大学生にはそういう要求ができるかもしれないのですが、高校生となるとどうでしょうか。改めて、中京大学でのことを振り返ると、私は実はゼミ生を1学年24人持っていて、ゼミ全体だと3学年72人を見て毎年24人にとにかく卒論を書かせなければいけないという状況の中、やれてきたことはこんなところかなというような感じがしています。

アドミッションとなるとどうしても公平性が問題になりますから、西浦さんの話を伺っているとやっぱり息苦しいなというのが率直な印象でございます。とても大変な努力をされているところに何という言い草だということですけども、これがもし大学教員の仕事だということになるとすれば、ちょっとやってられないかなという印象を持ちました。

最後に、チャットGPT、僕はこれに非常に興味を持っています。生成AIで学生にレポートを書かせることの是非について議論がありますが、実際には教員の方がよっぽど使っているのだそうですね。私も今いろいろ、この件について感想があるのですけれども、皆さんがどうお考えになっているかも知りたいところです。教育の場面或いはひょっとしたらアドミッションへの応用も十分あり得るんじゃないかなと思ったので、そのあたり伺いたいなというふうに思っています。

コメントへの応答

(今村敦司)

附属学校ではアカデミックライティングの授業があり、3年ほど前からはデータサイエンス、統計の授業もそこに入れて参りました。最初にご紹介した総合人間科の事業を進める中で、高校だけでも手を入れて、もう少しちゃんとした、正しくこれはこうだっていえるような文章を書けるようにしようという機運が高まりまして、私たちが最初に手を入れたのは国語科の授業でした。意見文の書き方、正しく意見を言うにはどうしたらいいかということで、感覚で書いてあったり、文末が「思う」のような曖昧な表現で書いてあったりするものをきちっと言い切る、というような指導から始めて、本校国語科で『始めようロジカルライティング』という本を作って出版いたしました。

この本の出版に当たっては戸田山先生のお力を借りて、執筆途中の原稿をお見せしてご意見をいただきながら出版しました。今も本校の授業で使っていますが、おかげさまで5版を重ねています。もともとのターゲットは中学生と高校生だったのですが、出版社から大学の初年次教育でも使えるようにしたらどうかという意見があり、例題を大学生向けに変え、論文として適切な形式にするための引用の方法なども加えて出版しました。この本を最初は国語の授業の中で教材にしました。

実際に高校生に論文を書かしてみると、世の中でいわれていることが本当にそうなのか同じ学年の子たちにアンケートをとって確かめたいというような場面が出てきました。こうなると、次はアンケートの結果を正しく分析して表現するにはどうしたらいいか学ばせる必要があるということで、統計やデータサイエンスも教えるようになったという経緯があります。SSHとSGH両方の指定を受けていた時期もあるものですから、生徒が文系理系のどちらをテーマに選んでも本格的な論文を書けるようにカリキュラムに手を入れました。今は授業の中でも全員必修でデータサイエンスを含むアカデミックライティングを学んでいますので、生徒はひいひい言っていますけれども、そこで学んだことを使って卒業論文を書いています。中身としては革新的な新しい発見ではなくて、たとえば世の中で言われていることを追実験してみたらうちの高校生にも当てはまったというようなレベルではありますが、論文の形で書けるようにはなっているのではと思っています。

多様性に対する手当については、奇跡的にうまくいっているようなところがあります。本校は全日制普通科ですけれども、卒業生の進路先は多様です。いわゆる難関大学や医学部医学科に行く子もいれば、専門学校に行く子も就職する子もいます。就職する生徒も勉強が嫌いだから就職するというのではなくて、自分はこうしたいからそれに一番早い道はこうだっていう選び方をしています。専門学校への進学もそうで、大学を受験する学力があっても、たとえば航空業界に100%就職したいという理由で航空専門学校に入った生徒がいました。そこでは航空機の整備士の資格が取れて、100% JAL・ANAの方へ行けると、そういうことを知ってわざわざそこに進学したんですね。

同じように鉄道マンになりたいという生徒が、高校卒業段階でJRに就職しました。大卒で同じ企業に就職するのは難しいけれど高卒者は比較的就職しやすくて、新幹線の運転手にはなれ

ないんですけど、でもいけるからと。高校を卒業してみんなが大学へ通うなか、その子は駅員として切符売り場で働いていました。次の進学先に入ることが目的じゃなくて、その先を見据えて、自分がどうしたいかっていうことを考えさせようと本校は考えています。全員が100%納得しているとは言いませんが、だからこそ大学で遊んじゃうと自分の目的が達成できないと思うわけですし、それぞれの子が自分の適性を生かしながら、どういう目的でどんな学びをすべきかということまで考えさせたいなというふうに思っています。

(西浦明倫)

コメントをお伺いする中でやはりもう一度改めて考える必要があるなと思ったのが高大接続の「接続」というところです。それは単に入試ではなく学びとしての接続で、高校卒業段階でいかにそれまでの学びのプロセスを評価したとしても、それが大学でどう続くのか、この点がやはり1つテーマとして重要になると考えます。今私は実際に高大接続の探究型教育改革、大学のカリキュラムの検討に携わっていますので、そういった面からも改めて考えていきたいなというふうに思いました。

(高橋まりな)

大塚先生から、早期入学の取り組みとして高校生に大学の授業を受けさせると、一部のうまくやっけていける生徒は学びが多い一方で、自信を喪失する生徒もいるというお話がありました。私がセンターで担当している「学びの杜」というのが、まさに名古屋大学の先生方の講義を高校生に公開するというものなのですが、現在の実施後アンケートからは見えてこないんですけど、参加者の中には自信をなくしてしまった子もいたかもしれません。先取りさせることの問題にあまり意識が向いていなかったということを実感しました。アンケートも状況を把握できるように変えたいと思います。

自覚したという部分で、他にも思い出したことがあります。私が作った教材で研修を受けた附属図書館サポートスタッフの大学院生が、先日名大附中3と高1の生徒に出張講座をしたのですが、その授業の中で、大学ではこういうプレゼンの仕方が普通だから、自分の発表内容と関係のない演出を入れたりはしないで淡々と発表しなさいという助言をしたんですね。私にとっては自分が作った教材なので、鏡を見るような感じで見ていました。そうしたら、附属の子がハイって手を挙げて、演出凝りたいです、音楽流したりパーってかわいくアニメつけたりしたいです、なんでいけないんですかと質問しました。授業した院生にしてみたら、教材にあるからそう教えただんだけ、そういうことをすると大学の先生はイラッとするからやっちゃいけないんだぞと思ったんですけど、そう説明するわけにもいかず困った様子でした。それを見て、高校生に対して大学の常識でダメだよって言うのがいいことなのかどうか、私にはもうよくわからなくなってしまうと思ったんですね。来年度から、附属の高校1年生の子たちにアカデミックライティングを教える予定があるのですが、やらない方がいいことをやっってしまうようにするという点で、非常に工夫が必要だなということを実感しました。村上先生がさっきおっしゃったように発達段階にもたぶんすごく差があって、高校1年生なんて本当に子どもみたいな子もいれば、ある程度大人な子たちもいると思うので、工夫しながらやっていきたいと思っています。

座談会を終えて（高橋まりな）

記録の終わりに、第2回座談会の中で注目された論点をまとめる。今回の座談会は高校、大学入学者選抜、高等教育の現場の声を出発点とする議論として企画され、話題提供者とコメントーターが各々の個人的な体験を振り返りながら意見を交わした。

大学で学ぶためには学問領域ごとに研究に必要なスキルやツールを身につける必要があり、論文を書くためには書き方の型を知らなければならない。どこまでが型として必須であるかを識別し、ルール範囲内で独創性を発揮することは難しいことであるが、難しいということは踏襲の必要性を否定しない。これに関連して、最初は模倣・借り物でも続けていくうちに自分の物になっていくという寺子屋式学習モデルが示された。また、ある意味で踏襲に長けた存在である生成AIの状況も参照しながら、「自分の言葉」とは何かを改めて考えることの大切さが示唆された。

大学で専門的に学ぶ上で必須のツールであっても、高校生にとっては学ぶことが必須でも適切でもない場合があり、無理に修得しようとする生徒の自信喪失につながるケースのあることが指摘された。学習する内容の難しさに関しては、学年だけでなく生徒の多様性の観点からも配慮が必要である。高大接続を冠したイベントでは、当センター主催のものも含め、大学で必要となるスキルを先取りして高校生に学ばせようとするものがしばしばあるが、参加者に適合する難易度かどうかは発達段階の個人差を含め慎重に検討されなければならない。また、高校にふさわしい学び方が大学で通用しないということは十分に考えられ、また生徒が高校在学中の研究関心や問題意識を維持したまま大学に進学するとは限らない。高大の学びのあるべき連続（または非連続）性については、高大「接続」のひとつの論点として引き続き注視する必要がある。

「接続」装置としての入学者選抜において、高校までで育った生徒の探究心を評価対象にする試みについては、注目すべき点が2つ見出された。ひとつは、探究心があると認められた生徒を受け入れた後の大学に、それを充分生かす準備があるかどうかである。もうひとつは、探究心を評価するという試みに対して受験者が対策するようになってしまうと、本来評価したかったものが測れなくなってしまうのではないかという懸念である。

附属学校の実践については、生徒の問題意識が個性と一体となって育つような学校文化について議論がなされた。卒業時に「専門的な学びがやっどできる」と喜べる生徒たちは、その後の進路に引き継いでいけるような興味関心を既にこころの中に持っている。大学での学びに期待しながらスキル獲得を急がず、「まだそのときでないこと」を理解しながら「いつかそのときはくる」とたのしみに待てるようなゆるやかな接続について、引き続き検討していきたい。